
緋弾のエリア ～道化な鴉は世界を騙す～

スギヤン@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 〈道化な鴉は世界を騙す〉

【Nコード】

N8510S

【作者名】

スギヤン@

【あらすじ】

俺は、確かに生きたいと願った　だが……転生するとは聞いてないぞ

衛宮士郎の兄がいろんな事情があって転生　第一の目的は元の世界に戻ることに……。最近は忘れてるっぽい
さて、男は自らが持っている力で生き残れるのか……原作介入し始めました

暇で仕方ない（最近は少し忙しい）作者がない文才を使って書いています

最低一週間に一度は更新します（ここらは、学校行事その他がきつすぎて遅いです（＜―＞））

感想、ご意見、評価を待っています!!

プロローグ（前書き）

こんにちは 初めまして スギやん@です 今回初投稿しました。
書き方に至らない点もありますがよろしく願います

プロローグ

ガキンツという音が周囲に響き渡る

それはある2人によって奏でられていた　その音はだんだん速さを増していく

そして大きな音が響いたかと思うと、周囲は静寂に包まれた。
そして1人の黒いジャケットを着た青年が話しはじめた

「流石にやるなあ：　英雄王の肩書きは飾りじゃあないってわけか」

それに返事を返すのはこの時代にあつてない金色の鎧をきた青年

「我を見くびるなよ雑種。　ふん、：しかし雑種風情が我とここまでの勝負をするとはな」

「英雄王にそう思わせるとは俺もすてたものじゃあないなあ」

黒の青年は冗談めいた言葉を返した。　その言葉を聞いた金の青年は「では、そろそろ終わりとするか起きろ、エア」と言い、後ろから出てきた剣を手に取る。

対する黒の青年も目をとじ「そうだな、さっさと終わらせよう」手に持っていた刀を腰にかけた鞘にしまい構える

2人を取り巻く雰囲気が一気に変わった　そして再び辺りに静寂が訪れる　だがそれも一時だけ

「「　いくぞ」」

という2人の声で静寂は破られ、それぞれがもてる力の限りをつくして攻撃しようとしていた

「天地乖離す…

「無量一刀居合い…

「『開闢の星（鬼切）』」

一つは魔力の激流が　一つは魔力の斬撃が　お互い凄い勢いでぶつかり合った

「悪いなギルガメッシュ　この刀『刹羅』は、魔力、炎、雷などあらゆる力を吸収し、こちらの力に変えちまう能力を持つてんだ」

黒の青年はそこに突っ立ったままそう言った

「ふん、見事だ　雑種のくせに我を倒すとはな…　いい退屈しのぎにはなったわ」

そういいながら金の青年…ギルガメッシュは倒れ込んで消えていった

「はあ、さすが英雄王の切り札　すべて吸収なんて出来るわけなか

ったか　ぐふっ」

言い終わるがいなや青年は倒れた。　そこに3人の男女が駆け寄ってきた。

「どうしたんだ　士郎、凜、セイバー？」

「大丈夫なのか　恭兄さん！」

士郎はそう尋ね、凜は　「まさか、死なないわよね恭介」と言った

「そのまさかだよ凜　もう限界みたいだ…」

恭介はそう返した

「キョウスケ　やはり私が戦っていれば「セイバーの責任じゃないただ俺が戦いたかっただから俺の責任だ」ですが…」

「セイバー　自分を責めてもなにも変わらない　だから気にするな」
「分かりました」

恭介は分かればよし、と言い微笑んだ

「ちょっとあんた、自分の状態がわかってんの。　あんたは死ぬのよ」

凜は怒った声でそう言ってきた

「そんなのよくわかってるさ　自分のことは自分が一番わかっている」

ならなんで笑っているのと聞いてきた凜に恭介はこう返した

「さあ、なんでだろうな　だがこれだけは言える。『俺は絶対に

間違っていない』とな…」

「未練とか後悔とかないの 恭兄さん？」

「ないと言ったら嘘になるが でもそれは俺が自分の意志で進んできた道を否定しちまう。そんなんだったら俺が生きた意味は無意味になる。だが俺は自身の人生は無意味じゃない、有意義だったと思うっている。 だから俺は間違っていないんだとそう思うんだ」

恭介の言葉に士郎は小さく何か呟き、黙った

「あんたは… あんたはわかってない 残される者達の気持ちを」

凜は震えた声で話し始める

「わっ私はまだあんたに伝えない事がたくさんある。 なのにあんたは、あんたは…」

「……凜、ほんとにごめん」

「はあもういいわよ恭介、あんたはいつもそう。 なんの事か気づかずに謝ってるんでしょ。 まあそれがあんたらしいわ」

そう言い凜は微笑んだ

「ありがとう、凜。 そういつゲホ、ゲホ ……ふうーもうお別れみたいだな。最後に士郎、俺がいなくてもしっかり生きるんだぞ。 お前なら正義の味方にきつとされるさ。 あと、俺ぐらい投影が出来

るように日々鍛錬に励め。「わかったよ 兄さん」次にセイバー、お前はぐうたら生活すんなよ。そしてここでの生活を大切に。「言われなくてもわかってます！」ははっ、ならいいや。 次に凜、お前は変なところでうっかりしてるからな。気をつけろよ。あと、士郎の事よろしくな。「わかったわ。でも、うっかりは余計よ！」すまんしかし事実だ。「ううゝ」最後にアーチャーいるんだろ。まあいなくてもいいが、お前も一応俺の弟だ。だからこそ言おう。答えは出たんだろ、ならそれに向かい突き進め。それが一番だ。「…そのアドバースありがたくいただきます」なあにお前は俺の弟だからな。

さて本当にサヨナラの時かな？」

「本当に逝っちゃうのね。あんたはいつも勝手なんだから」

凜は呆れながら言った

「それが俺だからね」

「…：そんなあんただから私は惹かれたのかもね」

凜は小声で呟く

「なんて言っただ、凜？」

「なんでもないわよっ／＼／＼／＼／」

「おっおお そっそうか」

恭介は思わず声がうわずった

「さて そろそろ逝くわ。みんな幸せに暮らしなよ。じゃあなみんな
待って！」なんだよ、凜？」

「最後に……」

そう言って凜は恭介に近寄りそして……

「ななななにすんだよっ／＼／＼／＼／」

「そっそれはおまじないよ／＼／＼／／／」

「おまじない？なんの？」

「あっあんたがこの世界に帰って来れるように……」

恭介はとても驚いた顔をして

「お前はあほか。死んだらどうしようもないだろ。」

「普通だったらね。 だけどあんたの変な魔術があるでしょ？それ
を使えば……」

そう恭介には変な魔術がたくさんある

「あれか。 確かに理論上はいけるな。でも確立は五分五分だぞ。」

「大丈夫。 なんとって私だからね。 必ずやってみせる」

凜は決意をした顔でそう言い切った

「ははっ なら待ってるさ。じゃあ今度こそ逝くよ。期待しないで待ってるわ」

恭介は笑いながら言う

「待ってなさい。必ず助けてみせるから。そしたら……」

side kyou suke

最後に凜が何か言っていたようだが聞き取れなかった

しかし俺はどうなるのかね？と先を考えていると声が頭に響いてきた

『あなたはまだ生きたいですか？』

と聞いてきたので、 当たり前だ！と答えたら

『では、あなたに第2の生を与えましょう』

と言ってきた 俺はあんたは誰なんだ？と尋ねた すると

『私は聖杯の意志。 残された欠片です
では行ってらっしゃい』

そんな声が聞こえたあと俺は意識を失った……

プロローグ（後書き）

多分、分かる人は分かると思います

今回は主人公の転生前の話でした。

いまんところ、アリア関係ないわあO R Z

第1話 スタートした物語（前書き）

こんにちは

今回は、前回同様、かなり短いです

まあ、始まりの話なので 是非読んでください

第1話 スタートした物語

side kyou su ke

どれだけ時間が経ったのだろう……

俺は急に意識を取り戻した　ここはどこだろう？

そう思い目を開けてみる……

「……知らない天井だ」

なぜか言わなくてはいけない気がした

ところでここは本当にどこなんだ　俺は生き返ったはず……

だが俺はこんな場所は知らない。病院じゃないしなあ、誰かの家なのだろう、と思っっていると

ガチャッ

うん？

誰かが入ってきたみたいだ　この家の人かな　なら助けてくれたお礼をしないと……

そう思い俺は身体を起こし…… あれえ、

身体を起こせない　手を使おうにもなんか違和感が……

そんなこんなで身体を起こそうとじたばたしていると

「あはは、 元気だねえ、天智^{てんじ}は。」

天智？ 誰だそれ 俺の名前は衛宮恭介だぞ そう言った……
言ったつもりだったんだが

「ばあ あぶうゝ ばぶば」

あるえ なんて喋れないの おかしいな

「ははっ 本当に元気いっぱいだねえ。 「コンコンコン」 うん？
おつ天智、お母さんがきたみたいだよ」

ドアから1人の女性が入ってきた

「天智、お母さんですよ。天智の様子はどうか？ あなた」

「天智は元気いっぱいだよ。ほら天智、お父さんだよ。分かるかなあ？」

そう2人の男女は、声をかけてきた。 だが俺の両親は、俺と弟、
士郎を残してあの大火事で死んだ……

そういえば、さっきからおかしな点がたくさんある 手がうまく使

えなかったり、ちゃんと言葉が話せず赤ちゃん言葉になったり……

うん？赤ちゃん まさか…… 俺は自分の身体をよく確かめてみた
よく見てみると俺の身体は縮んでいて、手足は短かった

なにいい 赤ん坊になってるやんっ

でも何故だ 俺はあの時死んだ それであの声のやつに 第2の生
を……………

第2の生ってまさか、転生のことだったのか 嘘だろ

そう俺が考え込んでいると父親？が話しかけてきた

「うん？どうしたんだ 顔をそんなにしかめて。」

おっと、ヤバイ 顔にだしてたか とりあえずここは取り繕おう

そう思い、俺は、顔を少し笑顔にした。

「笑ってるし、大丈夫なのよね? ……でも、ほんとに可愛いわあ」

「それは当たり前だよ。君と僕の子供だからね。 ニコッ」

「まあ、あなただったら。」

そう話しながらいきなり、ラブラブな空気に入ったこの2人を見るのがつらくて、目を閉じた

はあく 俺、一体どうなるんだろう

これから、いろいろ調べなくちゃならないなあ

まず、この世界の事

ここは俺が前いた世界なのか

次に、この世界に魔術はあるのか ある場合 オーナーがいるんだろうから、一応挨拶しないと

次に、俺は、前いた力が使えるのか

使えれば、凜がもしかしたら、助けてくれるかもしれない

しかし、使えなければ? 凜でも助けるのは不可能だろう

はあ、聖杯のバカヤロー、心の中で叫ぶ……むなしいなあ

まあ、とりあえずはここで暮らしていくか

大きくなるまで、 思い切った行動ができないだろうし

まあ、なんとかなるだろう 深く考えても仕方ない

そう考え、俺は睡魔に身をまかせた……

第1話 スタートした物語（後書き）

次回から、もうちょっと書く量を増やしたいと思います

では、さようなら

第2話 こちらでの成果（前書き）

こんにちは

今回は多く書けたと思います
また原作キャラがでます

では、お楽しみください

第2話 こちらの成果

side Kyousuke↓Tenji

ハロー 皆さん 恭介改め天智です

あれから10年がたちました。

えっなに？ 早すぎるってこれはあれです、 所謂ご都合主義です、
はい。

だって、この10年間地味なことしかなかったからな

この10年間で分かったことは、 この世界は、前の世界にかなり
近いつくりになっている。前の世界じゃあないってこと。実際に前
に俺が住んでいた町はなかった。あと前の世界みたいな魔術はない
ということ

だけど、魔術うんぬんは正直わからない 俺は、日本からでたこと
がないから。 あとの国には行ったことはないし。 でも確か凜が
言っていた気がするが、ロンドンの時計塔には魔術について研究し
ているところがあるっていったような

だからそのうち外国に行ってみようかなと思ってたりもする

まあ、この他に、少々違う事はあるが、 だが、一番ちがうのは、
この世界には武偵なる職業？があることだ

武偵とは凶悪化する犯罪に対抗して新設された国家資格で、その免許をもつ者は、武装を許可され逮捕権を有するなど、ぶっちゃけ警察もどきってやつだな

だが、警察と違うのは彼らは金で動く　ようするに金さえあればどんな仕事でも（まあ、武偵法ってやつのは許す範囲内だが）こなす、よく言えば〈便利屋〉悪くいえば、傭兵みたいなものさ

俺は、初めてこれを知った時驚いたぜ
何故かってそりゃ、こんな明らかに裏っぽい組織が、表でこのうと動いてんだからな　俺らの世界とは違うとこれをみて改めて思ったぜ。

そうそう、武偵で思い出したんだが、魔術はともかく、超能力らしきものがあると、きいた事があった。まあ、真実はわからんが…

あつ　そういやあ、最後に俺の家族なんだが

まず両親は、武偵だった　それも結構名前が売れている　父親の名前は、流堂孝治りゅうどうこうじで、母親の名前が流堂静香りゅうどうしずかだ

あとは、泰時爺やすときさんっていう祖父がいる

まあ、この10年の主な成果は、このくらいか
おっとほんとに最後に一つ　俺の魔術の件なんだが、どうやら使えるみたいだ　魔術回路もあったしな

まあ、こんなもんだな。

うん？最近は何にをしているかだと

それは………

「テンちゃん、早く遊ぼうよ。キンちゃんも待ってるよ」「うん、分かったよ。先に行っててくれ」

はあい、と言いながら1人の男の子の方に向かって、走っていく女の子

そう、最近俺は今、ここ星伽神社の境内で幼なじみ達と遊んでいるのだ

女の子の名前は星伽ほとぎ白雪しらゆき

星伽神社の巫女さんだ 性格はおっとりしていて大和撫子だ
男の子の名前は、遠山キンジ《とおやま きんじ》性格は、気さく
でいいやつ。なかなかのイケメンだ

俺の家系は、過去に遡ると遠山家らしい だから俺とキンジは、親戚さん 初めてあった時に意気投合し、いまでは親友といってもいいほど仲がいい そして白雪とは、なんか知らんが遠山家と星伽との関係で知り合った

だが、なぜか知らないが俺とキンジといった遠山家以外、男は入れないらしい

「テンちゃん。早く早く。」

「天智く。なにしてんの。白雪がうるさくてかなわない。早くきなよ。」

白雪とキンジがこっちに向かって叫んでくる。さて、そろそろ行くか

「分かったよ 行けばいいんでしょ」

あっ気づいているかも知れないが今の俺は、10歳の子供 口調を変えているんだ 正直喋りづらいがまあ一つの試練だと思って頑張ろう。 負けるな俺……

「来たよ。 でっなにをするの？」

「鬼ごっこだよ。 じゃあくるのが遅かったテンちゃんの鬼ね」

「それに賛成だね。 天智、ちゃんとやってくれよ」

そう言い、2人は逃げていく はあく まあ、がんばるか

ふう、今日も疲れたぜ 白雪マジ反則！！女子トイレに逃げ込むなんて……キンジは意外と速いし結構体力使った」

「もう暗くなってきたし、帰る？」

「そうだね 天智の家は、少し厳しいからね。早く帰らないとね」

「わたしはここだから別にいいんだけどね」

「僕の家は、門限破ると、すごいことになるからね、今日は解散ってことで」

「分かった ならまた明日」

「うん また明日ね テンちゃんキンちゃん」

そして各々家に帰る

――流堂家――

「おかえりー、天智」

「ただいま、母さん。父さんは？」

「今日から、3日間仕事でいないわ」

「どうやら、父はいないらしい」

「おつ天智、おかえり」「ただいま、泰時爺さん。　　そういやあ今日の鍛錬は？」

俺は、5歳の頃から爺さんに鍛えもらっている。　なぜかというとな俺は武偵になってみたい：：：というのは表の理由で、実際は俺は旅に出ようと思っている、勿論外国にな。しかし、最近は物騒だし、魔術は出来るだけ見せたくない、だからだ。

泰時爺さんも昔、武偵だったみたいでかなりの実力者だったらしいまあ、やる内容は鍛錬の時に教えるとして

「いや、今日は用事があってな　また明日じゃ」

「用事って？」

「お前が生まれた日に家の庭に刺さっていた刀があるじゃろ？あれを鍛錬で使おうと思っとな」

「ああ、あれね。分かったよ」

庭に刺さっていた刀とは、俺が前世使っていた刹羅だ俺もなぜ刺さっていたかは分からないがまあ悪いことじゃないからな。その刀を見た時に頭に、『ご都合主義』ってふと浮かんだけど何だったのかな？

「天智、お義父さん。ご飯ですよ。」

そろそろ飯のようだ

「爺さん行くよ。」

食卓には、美味しそうな料理が並んでた

「みんなそろったわね。それじゃあ…

「「いただきます」」

ふう、食べた食べた おいしかったあ、 まあ、正直いうと俺
や士郎の方が上手いが、愛情こもったご飯は、技術すら凌駕すると
いった所か

今日は、鍛錬もないし久しぶりに投影魔術の練習でもするか
俺は目を閉じ、精神を統一させ集中する。

トレース オン
「投影開始」

俺がそう言うとは、無銘の日本刀が…

「ふうゝ できたか。切れ味は…まあまあだな」

腕は落ちていないようだ さて、いつまでも持っているとかばいし
な

トレース オフ
「投影破棄」

俺の手から刀が消える

「あとは、強化魔術を少しやって明日のために寝るか」

「今日も楽しかったな」

ここ最近のいつも通りの日々。ここでの生活も悪くない、この二度目の生活を存分に楽しむとしよう
そう思いながら、俺は意識をおとした：

s i d e Y a s u t o k i

「のう、静香さんや　話があるんだが」

「はい、なんでしょうお義父さん？」

「天智のことなんじゃが……」

「天智ですか？　なにかありました？」

ワシは疑問に思っていたことを尋ねる

「あやつは、ワシらに隠し事をしているのではと思ってな」

「お義父さんですか。私もそう思っていたんです。あの子は小さい頃から物わかりがよく、頭がいいし、甘えてくるなんてほんとどない。普通小さい子なら甘えたいのに。それに部屋でこそそと何かやっているようだし。あの子がなにか考えているところなんか特にですが、私には時折あの子の表情が大人びているようにみえて仕方ないんですよ。」

ふむ、やはり静香さんもか あやつは何を隠しているんじゃないかだが……

「どんなことを隠していたとしてもいい。ワシらは家族なんじゃからな」

「そうですね、あの子がどんな子であれ、私の子供。あの子が自ら言おうとするまで待ちますわ。」

あやつもいい母親をもったわい
ワシも、おぬしが自ら語るまで待つとしよう……
さてと

「じゃあ静香さん、ワシは用事があるのでなあ。少し出るぞ」

「はい、分かりました。早く帰ってきてくださいよ」

「わかっておる。なるべく早く帰ってくるつもりじゃ。それじゃ

あ行ってくる」

「行ってらっしゃい」

さて、あの刀好きの所にいくかのお

――???――

ピンポン

「はいはい、いま出ますから。
誰でしょう?」

「ワシじゃワシ」

「むっ これは新手のワシワシ詐欺かもし「冗談はいらん!」 分
かりましたよ 泰時さん。何の用ですか?」

「あの刀を返して欲しいんじゃ」

「はいはい、あの刀ですね。 ちょっと待ってください。」

そういつて奴は家に戻っていく

――数分後――

あいつはいつまで待たすんじゃあ はあゝ そう思いやつに声をかけようとした時、一振りの刀を携えて出てきた。

「見つけました。これですね？」

「おお、それじゃ。相変わらず綺麗じゃのう」

「この刀はかなりの大業物ですからね。でっこれをなにに使うんですか？」

「孫の鍛錬につかうんじゃないよ。そろそろ剣術を教えてみようと思っ
てな。」

「ああ、天智くんですか。へえ、ならこの刀をプレゼントしまし
よう」

そう言いながら奴は玄関の所に掛けてあった刀をワシに差し出した

「いいのか？ かなりの物じゃろう。」

「いいんですよ。天智くんにはお世話になっているし」

「天智にか？」

「あっ っいいいいなんでもありません。その刀を貸してもらっ
たから、なあんて」

なにか怪しいがまあいい

「では、もらっていくぞ。そうそう、この刀の名は？」

「確かあゝ そうそう雷切らいぎりでしたっけえ」

雷切、雷切だっ

「雷切というところの雷を切ったとされる刀か？」

ワシは動揺を隠しながら聞いてみた

「はい、その雷切です。別名、千鳥ともいうらしいですけど」

「そんな物をあやつにあげるのか？ 本当にいいのか？」

「はい、いいんです」

「まあ、お前がいいなら貰っておく。さて、急いで帰らんな。それでは。」

「はい、天智くんによろしくと伝えてください」

その言葉に頷いてワシは帰っていった

「天智くん、やはりあの事は直前まで言わないつもりですか……」

彼の独り言は、風にかき消されていった

第2話 こちらの成果（後書き）

どうでしたか

とりあえずキンジと白雪を出して見ました これで、ある伏線を張
っちゃいましたが回収するかは……

次は鍛錬についてかな

第3話 L e t ' s 鍛錬 (前書き)

こんにちは

今回はテスト勉強が忙しくきつかったので短いです

ではご覧ください

第3話 Let's 鍛錬

Side Tenji

次の日、俺は朝早くから爺さんに呼ばれた

「なに、泰時爺さん？　こんな朝早くから用事？」

「うむ、天智これをあの刀好きが渡してくれと」

そういつて爺さんは、俺に一本の刀を手渡した

「爺さん、これは？」

「見ればわかるじやろ、刀じゃ」

「いやいやいや、刀なのはわかるけど何故これを俺に？」

そう、あの人はやすやすと刀なんかくれるわけないんだよな　何か裏がありそう

「なにやら、天智に世話になったとかなんとか」

おいおい、あのヤロー俺の秘密バラしてないよな　やばいな
うまく切り抜けないと

「あっあれかなあ。前に可愛い女の子と出逢えちゃうサイトを
教えたお礼かな？」

「……やっちゃったあああ やばいって!! つい、変なことを口走ってしまったああ。」

「うん? なんじゃそれ?」

「たっ助かった」 爺さんがそういうものに疎くて良かったぜ。まじありがとう神様 今日が無事生きてい 「……とでも言うと思ったかあああ! 今の話じっくり聞かしてもらうぞ」 けなかったああ 神様の所為だ なんだよ神様って喜ばしといて一氣にどん底まで落とすのが好きなのかよ

「こうやって俺が神様を恨みがましく思っていると」「ご飯が出来ましたよ」 とまさに助け舟がきた

「むっ、天智よこの話はあとでじゃ。 飯を食べにいくぞ」

あと? そんなのあるわけないじゃん 朝食を食べたら即刻逃げ出してやる これなら大丈夫さ 万事問題なし……と思っていた時期が僕にもありました

「さて、さっきの話納得いくまで聞かせてもらおうぞ?」

「爺さん、さっきのは失げゲフン、ゲフン、冗談だよー」

「途engahにか聞こえたようじゃが「きつ気のせいだよ。」 そうか。ほんとに冗談なのか?」 ジー」

「当たり前だよ。前テレビでそんなこと言ってたから使ってみたかっただけ。それより、この刀かなりの物だね？なんて名前なの？」

「雷切という名前じゃ。まあ、お前は知らんじやろうがな、有名な刀じゃ。」

ふう〜なんとか話題を変える事ができた。しかしなあ、雷切だとは……あの人そんな日本の国宝級の刀持ってたのかよ。だが雷切とは……あの某イチャパラ好きの先生が頭に浮かぶ

「なんだかカッコいい名前だね」

「確かにな。雷切なんぞくれるとはな。お前は幸せ者じゃぞ」

それはいえてる

雷切とは、持ち主、立花道雪が雷を切った時に使われた名刀中の名刀だ

ほんと、あの人ができるなんて……

「それより、今日から鍛錬に剣術をいれようかと思っている。そろそろ基礎が出来てきたころだしのお」

「えっ本当に!？」

「ああ、本当じゃ」

やったぜ ついにあの地獄の基礎作りから解放されるうう

「じゃあ早くやろうよ。」

「まあ、まで。いきなり本物を使うわけではないぞ。まずは木刀から」

「いや、爺さん、俺扱えるよ刀……」

「はあっ いきなり何を言ってんじゃ!? 使えるわけなからう」

「あっ、そっそうだねー 使えるわけないよねー」

「お前は、馬鹿か？」

あぶねー そうじゃん俺、いまんどこ刀使えない設定だった
あと少しでヤバかったぜ

「まあ、それより早くやろうよ」

そんなこんなで俺たちは鍛錬をすることに 場所は俺ん家の庭だ
結構広いんだぜ まあ、親が武偵をしてるからな当たり前だが

「では、さっそく始めるとするかのお」

「うん、やろうやろう」

やっぱり剣術は面白いなあ　まあ、基礎からのスタートだが昔に戻っていたようで

今日やったのは、素振り100回と簡単な打ち合いだった　基礎が早くできたかららしいが、一応剣術習ってるから余裕なんだ
さあてそんなこんなが夜まで続き今日はやめになった

あつ、そういやあキンジ達と遊ぶ予定だった：：　まあいいか
さあて今日は寝るとしよう

明日もいい日になるといいなと思いつつ俺は床についた

第3話 L e t ' s 鍛錬（後書き）

今回は武器取得と鍛錬の話

雷切は一応現代の話にもあります

次はちょっと変わった感じで書きます
では、さようなら

第4話 天智の評価そして不穏な風（前書き）

こんにちわ

今回は主人公目線じゃありません

ではどうぞ

第4話 天智の評価そして不穏な風

Side K i n j i

「今日、あいつ来なかったなあ」

俺は家への帰り道ふと呟いた

あいつとは俺の親友 流堂天智の事だ。

天智とは5年前に初めて出会った いきなり父さんに「お前と同年の子が家に来るぞ」と言われた時は驚いたなあ 最初見た時は確かあいつのことを嫌ってたっけ でもあの時あいつを俺は第一印象だけ嫌ってただけで話してるうちに結局1日で仲良くなったんだよな。まああいつは最初、俺が嫌ってたってことにきづかなかったんだが……。それでも、そのままだと親友なんかにはなってなかったなあ

確かあいつを親友と認めたのは、あの時だな

確か、その日もこんな帰り道だったな

あいつと近くの公園で遊んだ帰りだったっけ

……過去

「今日は楽しかったな。また行こうぜ」

あいつはそういういながら石ころを蹴っていた

「ああ、そうだな。」

俺もそう返事をしながらあいつの真似事のように石を蹴った
すると、角から出てきた数人のチンピラ？に当たったんだ。

「痛っ」と言いチンピラは俺の方に向いてきた

「このクソガキがあ。おい世の中の厳しさを教えてやれ」

そうやつらのボス？が言うのと1人の大人が俺に殴りかかってきた

今の俺ではこいつには勝てない、俺の額に冷や汗が流れる……

俺の家系は妙な血筋がある それはある事をするとな能力が普通に比べて格段にあがるんだ。これは代々遠山家にある能力

だが俺の発動条件ではいまは無理なんだ
だからどうすることもできないな

そんなことを思いながら俺は奴の拳を受ける……前に誰かに止められた

「いきなり殴ってくるなんて最低だね」

そう言う天智は殴りかかってきたやつの拳を片手で受け止めてた

受け止められた、そいつの顔は驚愕に満ちていた。

「くっ このクソガキがあああ」

「ねえ、知ってる？弱いものほどよく吠えるって」

「なっなんだと。」

よくも俺をコケにしてくれたな」

そう言ってやつは今度は天智に殴りかかった

「はぁー もう演技終了ー。…… さて、では子供の恐ろしいを見せてやるか……」

その瞬間、天智の雰囲気が変わった なぜだか分からないけど 近づいたらいけない そんな雰囲気を醸し出している

「さてさて、いきますよ。 トレース・オン ボソツ」

今、俺はすごいものを見ている 天智の手からいきなり真刀、いや模造刀だな、多分。だって切れてないし。

……そんなことはどうでもよくはないが、俺がとりあえず一番びっくりしているのは天智の強さだ。どんだけ頑張っても見えない……振った刀が見えないんだ

戦いというより、圧倒的なじめも終盤を迎え、ついに最後の1人を倒した

「これが子供の恐ろしさってやつですよ。そろそろどこかに逝っ

てもらえませんかね？」

そんな天智の、あれ漢字違うくね、みたいな言葉でチンピラは怯えながら、どこかに走り去って消えていった……

「天智、いまの強さは何なんだ？」

俺は恐る恐る聞いてみた

「えっ……、あゝあ、やっちゃったな。さっきのは絶対内緒だぞ。絶対だからね。」

口調も戻った天智は

「助けるためとはいえやっちゃったなあ」

と呟いていた

俺は天智のすごさに驚きそして俺のことを守るためになにも考えないで、行動してくれた事にとっても喜んだ。だから、俺は……

「分かった。ありがとうな……親友」

と言った

あいつは俺の言葉を聞いて、笑いながら

「どういたしまして……親友」

と返してきた

…現在

あれ時のことはあれからあまり触れてない

だが俺は鮮明に覚えている あいつの

勇姿、強さ、迫力

どれにおいてもすごかった

俺はあいつと肩を並べるくらい強くなりたい
そう意識したのもあの時だ

あいつは確か武偵になりたいらしい

俺の目標もそうだ

ならお互い競争するだろう 今は無理だがいつか追いつきあいつに俺の強さを見せつけてやる！

だが目標は高いなあ あいつは文武両道、人あたりが良いし：そ

れにあいつは気づいてないが、容姿が良いからよくモテるんだ ま

あ、かなりの鈍感だから恋愛に発展しないが

… うん？ お前が鈍感って言うな？ 俺は敏感だぞ

そうこう思い出に浸っていると家に着い

た

「明日は、あいつくるかなあ？ 白雪が怒ってたからな。」

俺は明日、あいつが困る姿を想像して笑った。

今日はやけに優しい風が吹いていた…

…???

時刻は深夜2時、辺りは闇色に染まっている　近くの公園で2人の男がいる　顔はフードで隠されて見えないが体格で男だと分かる

「例の家はどこだ？」

「もう少し先です。」

「まあ、今日は下調べだ。特に行動にうつるつもりはない。だが、あの血筋は完全に潰さねば　今は気づいてないがあれに気づいたら、我らの邪魔になるかもしれん。」

「はい、分かります　いつ行動にうつします？」

「あと半年後だな。家族を一気に殺す。」

「ではその日まで。」

1人の男は礼をしながら去っていく

「くっ、どうにか助けられないものか…：親友よ」

男は悲しげな声でそう呟いた…：

だが、それを聞いていた者がいた

side Yasutoki

さて、まずい話を聞いたわい たぶん家の事じゃろ

だが、いまこの話を聞いても、打つ手が少ししかない。それに、多
分大きな組織だろうから逃げ切れないだろうのお。

ウチの夫婦は戦うだろうし：：：どうなることやら、まあ、わしも一
応手をうとう

まずはあいつに電話じゃ

老人は足早にその場所から立ち去った

第4話 天智の評価そして不穏な風（後書き）

次は白雪編をつくるつもりです

今回みたいなのを時々つくるつもりです
さて、最後にフラグたてときました

では今日中に投稿するつもりですのでまたあとで

第4話 天智の評価2 白雪が見たもの（前書き）

こんにちわ

まずはすいません

昨日中に投稿するつもりでしたがほかの作品の方が出来たらしいんでそちらに回ってました

では、どうぞ

第4話 天智の評価2 白雪が見たもの

…星伽神社

side Shirayuki

「今日はテンちゃんくるかなあ？」

私は独り呟く。

テンちゃんとは私の友達の流堂天智君。知り合ったのはキンちゃんが珍しく知らない男の子を連れてきたのが始まりだった…

私は最初、びくびくしていた。だってキンちゃんが連れてきた子だから悪い子じゃないのはわかっていたけど、でも初対面のそれも男の子にどんな風に接すればいいのか分からなかったから。

その男の子もそれに気づいたのか知らないけど、私にあまり話し掛けてこなかった。

だけど日に日に私はその子は心を開いていった、といっても向こうは最初から開いてたらしいけどね

そんな日々の中、ある日の事だ。

私たちは鬼ごっこをしていた。

もうその頃には彼…天智くんは私だけでなくほかの子とも仲良くなっていた。

まあ、それで遊んでたんでいて、途中、私は逃げるので必死で周りが見えていなかったから、神社の外にでていっちゃったの。私が気づいた時にはかなり神社から離れていて帰り道が分からなくなっていた、確かそれから…

…過去

「ど、どうしよう。 帰れなくなっちゃった。」

私は帰り道が分からずオロオロしていた　すると大きな男の人がきて

「お嬢ちゃん、どうかしたのかい？」

と、聞いてきたので

「帰り道が分からないの」と答えた。

するとその男はこう言ってきた

「なら、オジサンが連れて行ってあげるよ」

「えっ本当に!？」

私は迷わずその男の人についていった。

あとでこの考えはいけなかったと後悔せずにはいられなかった……

あれから、歩いて5分位の頃、私たちはどこかの工場跡についた

「ここはどこ？」

「まだ気づかないのかい？世間知らずの嬢ちゃんだな。おい、お前

ら」

オジサンがそう言うのと数人の男が出てきて私に近づいてきて両手を縛られた

「さて、何円で売れるかな？」

「さあな。まあ、この容姿だ。高く売れるだろ、特にこの年頃が好きなブタども、な」

男たちは嫌な笑いを浮かべながらそんな話を話していた。

この時、私はやっと自分の立場を理解した

「だ、誰か助けて」

私は力いっぱい叫んだ

「うるせーガキだな。黙らせろ！」

1人の男が私の口をガムテープで塞いだ

……どうすることも出来なくなったしまった。

このまま売られるのかな、と思うと涙が出てきそうだった……

——誰か私を助けて——

私は体を震わせながら、微かな希望にすがった……

「いやあ、いたいけな子供にこんな横暴　を……　もしかして変態さんですか？」

すると、そんな事を言いながら1人の男の子が入ってきた。黒いフードをかぶっているせいで顔は見えないけど、声で性別は分かっ

た。

「なんだあ このくそガキは？ ガキ、ここはお前が来るところじゃないんだ さっさとお家に帰りな」

「でもそこにも子供はいるじゃないか。 あの子は帰らなくてもいいの？」

その黒フードの子は男の言葉をそう返した

「ちっ、いちいちうるさいやつだな！！なんだ、お前はあれか？正義の味方になりたいのか？ 馬鹿らしい、子供の考えることだな」

わっはっはと男達は笑う

私はそうは思わない、人の夢は自由だって……なんて考えてると

「お前らが……お前らがごときがその肩書きを笑うなっ！」

「なんだあ、正義の味方をバカにされて怒ったか？ 全く、子供だなあ」

すると子供は肩を震わせながら

「お前はいま一番いけないことをした

俺の知り合いの夢を、人生を否定した！！

俺はな、とある人物達を知っている……。

1人の男は叶わないと知りながらも正義の味方になる夢を追い続け最後に託して人生を終えた……

1人の男はその男の夢を引き継ぎ、正義の味方目指して、その難しさに躓きながらも、人生を進んでいった……

1人の男は正義の味方を志しその道に進み、一度は絶望しながらも

もう一度考えを改め正義の味方を選んだのは間違えじゃなかったと
もう一度その道を進んでいくと誓った……

そんな、お前らみたいな虫けら共と違う、強い意志を持ったこいつ
らの覚悟をバカにするなっ！！」

その発言の後、この場が一気に静まり返った

誰も声が出せない

たった1人の子供の迫力に吞まれて……

私はその男の子の声に本当の悲しみを、恐ろしいぐらいの怒り感じ
た……

「本当はこんな事をするつもりじゃあなかったのにな……

《lie be a truth》……嘘は本当になる

」

男の子はそうつぶやいた

すると男たちは気絶した

「やっぱり君たちは僕の敵とみなされなかったみたいだね。」

私はなにが起こったのか全然分からなかった。まさしく一瞬、その
一言だ。

男の子が私の方に近づいてくる。私は、何故だか分からないけど、
目を閉じた。

「寝ているようだね。疲れたのかな？まあ、顔が見られないしまあ
いいや」

そんな声が聞こえたので私は目を開けづらくなってしまった。で

も顔だけは、と思い薄くまぶたを開ける。すると目に彼の顔がうつった。最初は気まづかった彼の顔が……

……現代

そこからは覚えていない。とりあえず帰って怒られた。

彼とキンちゃんなども心配した様子でこちらを見ていた。

だけどね、私は知っているの。彼が助けてくれたことを、彼が私を助けるためにきてくれたことを……

彼が使った超能力？についてはふれない方がいいかな
あの時起きてたのがバレちゃうし

その時からかなあ

彼……天智くんの事をテンちゃんと呼ぶようになり、また彼を見る度になんだかドキツとしてしまうのは……

何だろう？ 病気かなあ
そんな事を思っていると

「天智、昨日はなんで来なかったの？」

「昨日は急用が入ってさ」

「子供に急用なんて入らないよね？」

「入るんだよ、たまには」

そんな会話をしている2人の声が聞こえた。私は

「テンちゃん、キンちゃん。」

と叫んで彼らの所に駆け寄った……あつ痛い こけちゃったあ。2
人がこっちをみて笑っている

「笑うな」

私は再び走り出した

s i d e o u t

暖かい春の風が笑っている3人の身体に吹く……

本日の天気は快晴なり、と

第4話 天智の評価2 白雪が見たもの（後書き）

どうでしたか

白雪編きちんと作りました

あと主人公の能力が出ました まだ種明かしはしません

白雪フラグもたてちゃった

次はまだ決まってませんが 頑張りたいと思います

では、さようなら

一部完結 降り注ぐ不幸…そして新たな道へ（前書き）

こんにちは

今回は頑張りました
自信作です

また重要な話です

では、どうぞ

一部完結 降り注ぐ不幸…そして新たな道へ

side Yasutoki

あれから半年たった…

この半年は長いようで短かった

奴らが来るであろう期間の間、わしは出来うる限りの事はした。

天智をそこらのやつでは相手にならないほどに強くした…

息子夫婦と話しあって迎えうつ準備をした

わしの協力者に連絡して仲間を増やした

あとは…待つだけじゃ

無事に終わるといいんじゃないが…

side Tenji

ここ最近、やけにおかしい

いや日常はあまり変わらないんだが

爺さんの修行がいきなり厳しくなったり、父さんと母さんが2人揃って家にいたり、普通この2人のどちらかは仕事でいないはずなんだが…

なんかあるのか

まあいいや さて、今日も遊びに行くか… 俺は、目的地に向けて歩いていく…

side ????

時刻は昼過ぎ

陽のあたらない路地裏に数人の黒いフードの男たちがいた
「今日が決行日だな。」

「はい、そうです。 いよいよですね」

男たちは密かに話している

「では、今夜、公園で……」

1人の男の声で男たちはおのおの姿を消した

「……クソッ。すまない。止めることは出来なかった。せめてあの友人達に祝福があらんことを」
残った男の独り言は、空に吸い込まれていった

side Yasutoki

時刻は夕方頃。まだ天智は帰っていない。

今日はなぜかいやな空気が流れている

今日はちょうどあの日から半年後

奴らめ、日は守るみたいじゃの

わしは仲間に連絡をとり家に呼んだ
そして息子夫婦と一緒に庭で待ち構えている

「お父さん、本当にくるんですか？」

「ああ、今日がちょうど半年後じゃ。
息子よ、気を引き締めろ」

さて、来るなら早くこい

あれから夜になった　まだ天智は帰ってない　あやつはなにをして
るのじゃ

早く帰ってこないとマズいことになる
早く帰ってくるのじゃ…

だが、わしの思いは届かなかったのか、奴らがきた

ドーン、と言う大きな音が聞こえたかと思うと5人の男たちが攻撃
を仕掛けてきた

わしと仲間たちは、銃を使い迎撃する
だが、よほどの強さを持っているのかこちらばかりやられていく
この暗さなのに奴らの狙いはいい

あちらで戦っている息子夫婦も押してはいるものの苦戦している
くっこのままでは…

この窮地にさらに最悪なことが起きるとはわしは思わなかった……

Side Tenji

「ヤバいな、もうこんな時間だ。それじゃあな、キンジ、白雪」

「ああ、また明日」

「また明日ね」

「ああ、また明日遊ぼう」

キンジ、白雪、俺の順番にあいさつして帰る
最近では、俺は演技することなく普通に生活している。
やっぱり疲れるからな

さて、こんなに遅いと怒られるぞ、俺は走り出した

家の近くまで来ると銃声がした

今日は父さんが訓練しているのかなあ

俺の家は山奥にある一軒家だ

だから訓練をしているても近所迷惑にならない。だから、銃声が聞こえてくることはよくあるんだけど、銃声がたくさん聞こえてくる
誰か来てるのかなあ 俺は家の門をくぐった

side Yasutoki

あれから、こちらに流れが向いてきた
これならいける、と 思った時じゃ

天智が帰ってきた

息子夫婦はそれに気づいた しかしそれがいけなかった その隙に
囲まれてしまった

「父さん、母さんどうしたの？ これは何!？」

天智は叫んだ

「ふっふっふ、油断したな。これで我らの勝ちだ。」

「くそっ……」

「では、まずは息子から死んでもらうとするか」

男の1人が銃を天智に向けた わしはその瞬間走って天智を突き飛ばした

side out

泰時は天智を突き飛ばした時、夫婦は動き出していた
素早く相手に銃を向け撃った
2人が死んだ、だが……

「油断したか。だがまだこちらほうが有利だ」

再び囲まれてしまった

一方、こちらは泰時が銃弾を受け倒れていた

「爺さん、大丈夫！？　なんで俺なんかを助けたんだ？　俺を助けなければ撃たれてなかったのに：」

「孫を守るのに理由はいらんじゃろ。
お前を守れて良かった。わしも安心して逝ける」

「爺さん、まるで遺言みたいじゃないか
まだ間に合う、救急車を呼んで「天智、もういいのじゃ」
爺さん：……」

「わしは長く生きた。いろんな事を経験して来た。もう充分じゃ、後悔はない。　いや、一つだけ、お前の成長した姿を見たかったのお」

「爺さんもういい、もういいからっ」

「最後に一つ、ゲフツ　てんじ：：：わしの：：：部屋に：：：拳銃が一丁：：：ある：：：わしからのさい：：：このおく：：：りものじゃではな：：：天智：：：……」

「爺さん、爺さん、　じいさあああんっ」

泰時の最後の顔は笑顔だった……

Side Tenj₁

なんでだ、なんで爺さんが、爺さんが死なないといけない

誰が悪い
敵だ
奴らだ

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す

コロシテヤル

俺は駆け出した

魔術で身体を強化し、1人の敵に殴りかかった 敵は急な俺の行動にびっくりしたのか動いていないまずは一番近くのやつを殴り飛ばし、次の男の首めがけて飛び蹴り。

メキツという音が首から出た。

そんなことは気にせず最後の1人を殴り飛ばした

これで仇はうてた、俺は敵を全員倒したと油断していた

俺が殴り飛ばした2人がこちらに銃を向け

「死ねええ。」

引き金をひいた

どうやら、甘く見過ぎてたようだ、俺は自分は死ぬんだと悟った
しかし痛みは来ない

「ギリギリ間に合ったようだね」

「そうみたいね」

父さんと母さんがそれぞれ俺と敵の間に入っていた。
2人の男は死んでいた

「しかし、やはりダメだったようだ」

「：：私もそうっぽい」

2人は倒れ込んだ

「父さん、母さんっ」

俺は声をかけた

「ははっ、天智、私をあの人所に連れて行って」

俺は言われるがまま母さんを運んだ

「ねえ、あなた？」

私たち死ぬみたいね」

「そうだね、僕たちはもうだめみたいだ」

「ウソだよね。しないよね」

俺はわかっているながらも聞かずにはいらなかった
すると母さんが

「天智、よく聞きなさい。私たちが狙われたのはこの身体に流れる
血のせいよ」

父さんがつづけて

「僕たちの血はね、1つは通称H S S、ヒステリック・サヴァン・シンドロームと呼ばれる血、これは天智も知っているよね？」

「確か、性的興奮か何かで、能力が格段にあがるんだろ？」

そう、と父さんは言い

「もう1つは、ソロモンっていう人の血が流れてるんだ」

「ソロモンだって！？あの、ソロモン72柱の？」

「そう、そのだよ。残念ながら僕は魔力がないので何も出来なかったけどね」

「ならなんで狙われたの？」

「それはね、天智、君が魔力を持っているからだよ。そうになると僕と静香を殺さなければならぬ。」

「なんで？」

「天智を殺しても僕たちがまた子供をうんで魔力を持った子供が生まれたら面倒でしょ。だからさ」

今の話を聞いてるとそれじゃあまるで

「俺のせいじゃないか。俺が生まれたからみんな死ぬことにな」「天智、最後まで聞いて」……うん」

「僕たちは君がうまれてきてくれて本当に嬉しかった。だから僕は君を絶対恨まない。多分先に逝ったお父さんも一緒さ」

「もちろん私もね」

「だから天智、自らを憎む事はしちゃだめだよ」

「分かったよ、父さん、母さん」

「よろしい、では、そろそろ逝くときかな？ 静香」

「そうね、もう限界だしね」

「最後に、天智、人を守る人間になるんだ。そんな心を持てる人間に……」

「私からは、天智、絶対寿命以外で死んだらダメだからね。私たちの分まで生きて。」

「うん、うん。分かったよ」

涙を流しながら天智は答える

「あっ忘れてたけど、天智、君は死んだことにならないと、追っ手がくるからね。ここを離れなさい。家に貯金があるからそれを使って。最後に家は燃やす。分かったね？」

「分かった。流堂天智はここで死ぬ。」

「よろしい、天智…元気でね…」

「天智、強く生きなさい 先にあっちで待ってるわ…」

side out

こうして流堂夫婦は息をひきとった

「みんな俺のために逝っちゃった。

…だから、だからこそ、俺はみんなの分この世界を楽しんでやる
っ！強く生きてやるっ！

…でも、今だけは弱くていいよね、泣いていいよね…うわあ
ああああ」

少年の叫び声は、空高くに昇っていった

空に月が、星が輝いてとても綺麗な空だった

まるで少年の家族を天に歓迎するかのよう…少年の心をいや
そうとしているかのように…

その夜、ある山奥にある一軒家が火事で燃えていた

死体を見たところ何者かと争った様子。ただ子供の死体だけは見
つからなかったらしい。そのかわり五人の死体が発見された

これはニュースで大々的に放送された

s i d e K i n j i

嘘だろっ そんなはずがない
俺はニユースを見て頭が真っ白になった あの家族が死ぬなんて、
あいつが、あいつが死ぬなんて
俺の親戚、ライバル、尊敬する相手、そして親友

「なんでだよ、なんで……約束したじゃんかよ……また明日って」

s i d e S h i r a y u k i

えっ ナニコレ こんなのもって
ニユースが流れていく

「そんなわけないっ、そんなわけないよ」

私は自然と言葉を発していた

テンちゃんが死ぬなんてそんなわけあるはずない

私を助けてくれた彼、いつも笑っている彼、私に恋ってものを気づ
かせてくれた彼……

そんな彼が死ぬなんて

頬をつたう何かが、瞳から流れた……

それは、ゆっくりとゆっくりと落ちていった……

s i d e T e n j i

「これからどうしようか
目的も持たず、行く宛もなし はあゝ」

俺は悩んでいた だからなのか数人に囲まれているのに気づかなかった

「その小僧。流堂の者だな。では、死んでくれ」

おいおい、嘘だろ

俺は焦った ヤバい、なにか手は……ない まじかよこんな所で：
奴は引き金を引き

「お前はなにをしている？」

盾に防がれた：うん？

目の前には赤い外套をきたあいつがいた

「なっなんでここにいるんだ、アーチャー？」

「その返答は後でしょう。まずはこの状況をどうにかしないと。」

まあ、余裕だが、と軽く言うアーチャーは一瞬で敵を倒した

「嘘だろ？なんだこの強さは」

敵はびびった

「まあ、嘘か本当かと言うと本当だが」

笑いながらアーチャーは言った

「さて、さっさと片づけるか……終了だ」

アーチャーはものの数秒ですべての敵を片付けた。俺はアーチャーの実力を知っているので、特に驚かず

「でっ、アーチャーはなんでここにいるんだ」

「ふむ、お前が死んだあと私自身の体も限界がきていた。それで凜に別れを告げて座に戻るはずだったんだ」

「だったってことはなにかあったのか？」

「ああ、なぜかは知らないが聖杯に《あなたに頼みたいことがあります》と言われてな、それで了解してここにきたわけだ」

「頼みというのは？」

「教えることは出来ない」

アーチャーの、いや聖杯の目的かあ

「というのは嘘だ。お前に固有結界について教えにな」

「あの変な世界か」

「まあ、そうだ。しかし、私は今日しかこちらにはいられないらしいのでな。では、始めるぞ」

「……まあ、すぐに出来てしまったな。私が教えることはなかったのでは」

アーチャーは苦笑しながら言った

「いや、アーチャーが教えてくれたからだよ。ありがとう」

「ふむ、お礼はありがたく受け取ろう」

とりあえず固有結界は分かった あとは、自分で練習だ

「さすがに、奴の兄 だけあって固有結界も一緒だったな」

アーチャーはなにか呟いている

「では、私は去ろう」

「待ってくれ、少し、俺の悩みを聞いてくれないか？」

俺は自らの悩みをアーチャーに話した

「それで貴様はなにをしたい？」

「だからそれを悩んでいるんだって」

「ちっ、あまつたれるな。あの時私にアドバイスした時のお前はど
うした。あんなに偉そうに他人に言っておいて、自分には何もな
かったのか？」

…はっ、そうだ、そうだな簡単な事だったんだ

「ありがとうアーチャー」

「進む道は決まったのか？」

「ああ、答は得た」

「そうか、なら言うことはない。それではな……兄さん」

「ああ、じゃあな、エミヤシロウ」

side out

お互いに振り返ることはせず歩いてゆく…… 2人は今、答を元に
歩きだしていく

この日の星はやけに輝いていた

……一年後

森を通ったところに小さな丘がある

そこには4つの墓がある

その墓の前に1人の少年がいた

「ははっ、俺の墓まであるな。まだ死んでないっての」

少年は小さく笑う

「父さん、母さん、爺さん、久しぶり。一年ぶりだね。俺は今まで日本を旅してた。様々な所を旅して思ったことは救われない人がたくさんいるってことだ。俺は、そういった人達を助けたいと思っているんだ

結構めちゃくちゃな話だよな、ばかにしてくれて構わない。だが決めたんだ。この道を進むって。それにこれは運命だったのかもしれない。」

少年は昔を思い出すように目を細めた

「俺達を拾って育ててくれたあの男の夢を聞き、弟の決意を聞き、赤い弓兵の道を聞いてきた俺だ。この道に進むことは必然だったんだ。だから俺は日本を出る。この国では多くの人を救うことはできないから。

この報告が1つ。

もう1つ、俺、組織を作ろうと思うんだ。

無知で力を振りかざしている奴らから弱い奴を守ってやるんだ。世界中を飛び回ってさ。だが表ではなく影から、そう、組織名は黒く知恵ある鳥、鴉^{レイフン}だ。

どうなるかは俺もわからない。だが俺は止まってははいられない。だから進む、その方がさ、俺らしいだろ、ははっ。

…じゃあ、またくるからね。それじゃあ、また…。」

少年は墓に背を向けてあるいていく
風が吹く、その音に混じって何か声が聞こえる 少年にはしっかりと聞こえたらしい、笑みを浮かべていた

少年は歩く。

まだ見ぬ未来に向かって……

一部完結 降り注ぐ不幸…そして新たな道へ（後書き）

どうでしたか

今回で少年編は終了 します

いま、オリジナル作るか原作に飛ぶか考えてます 意見ください
期限は水曜日の朝です まあなかったら適当に作りたいと思います
あと、一件あったのですが出して欲しいヒロインも感想で送ってく
れれば出来るだけです

主人公の設定（前書き）

完璧わすれてたので一部完結、これを機に書きました

主人公の設定

主人公 流堂天智

容姿：少し癖つけの

ある髪に整った顔、瞳の色は翡

翠色

身長：140センチ

年齢：11

誕生日：昔はわからない 今は家族が死んだ日を誕生日にしている

特技：ギター

好きなこと： 歴史の知識をすること（特に神話） お酒を飲むこと、歌を聞くこと

性格は、さっぱりしていていいやつ。めったに怒らない

しかしあることをバカにすると怒る

能力：魔術、固有結果、剣術、????

我らが主人公、名前はまた変わります

ソロモンの血をひく家

系と遠山の血をひくすごい血筋の少年

魔力は士郎の二倍くらいある

また、無量一刀流の師範代 この剣術についてはあとから説明があるのでお楽しみに

まだ能力を隠し持っているのでこれから使っていくつもりです

間章 第1 成長した少年と決意した青年（前書き）

感想こないのであきらめて原作の二年前を書きました

今回、オリキャラがでてきます

感想がリアルに欲しくなってきた今日この頃

ではどうぞ

間章 第1 成長した少年と決意した青年

電話の着信音になる

その持ち主は電話にでる

「もしもし、なんだ？…なるほど、そいつはやばいな。」

電話をしている青年…いや少年は、何かを話していた 髪は黒、身長は160cmくらいの日本人だ

サングラスをかけ、黒いジャケットにGパン、ブーツをはいている
「仕方ないなあ。せっかくの旅だったのに。えっ何々？…
当たり前じゃん。困っている人を見つけたら助ける、それが俺らの
ルールだろ。まあ、とりあえずそっちに行くよ。じゃあね」
携帯をきるなりその少年はバイクに跨り走っていった…

side ???

「なんでこんなめにあわないといけないんだ」

僕は物陰に隠れて小さく呟いた

あたりからは銃声が聞こえる

僕の名前は太谷結城 〈おおたにゆうき〉 二十歳になった記念に
ちようどここ、インドに旅行に来ていたらいきなり銃戦が始まって
ここに逃げてきたんだ

「はあ、不幸だ」

ふとツンツン頭の高校生が頭をよぎった なんだろう？

とりあえず早くここから逃げてないと

僕は、物陰から出て 走った…

あれからかなりの距離を走った
そろそろ安全な場所に出れるかな？

僕は歩みを緩めた

そしてもう少しと言う所で

「〈手をあげろ〉」見つかった

僕は、相手が何を言ったか分からずにおろおろしていた
すると相手も苛立ってきたのか銃を突きつけてくる

ヤバイ：：とりあえず僕は手をあげた

どうやら正解みたいだ 銃を離して見逃してくれるらしい
僕はゆっくりと歩き始めた

少し歩くと僕は立ち止まった

6人の男たちに子供たちが縄に繋がれて連れて行かれてた 僕はな
にを思ったのか

「その子たちをどこに連れて行く気だ。 解放しろっ」

と、つい口走ってしまった

言葉は分からなくても意味はだいたい伝わったのか奴らは銃をこちらに向けた

ああ、僕の人生はここで終わるのか

僕の過去が頭をよぎっていく これが走馬灯ってやつか
そんな事を思っていると

「あんたのその勇氣見せてもらったぜ」

僕の目の前に黒いジャケットを着た13、4ぐらいの少年がいた
「なにをしているんだ！？ 早く逃げないと」

僕はその少年に言った

「そっちこそ何を言ってんだ。俺はお前たちを助けるためにきたんだぞ」

僕は一瞬なにを言っているのか分からなかった

「もしかしくなくても信じてないでしょ？　じゃあ見せるよ……実力
って物をね」　少年の雰囲気が変わった

「このヒスリ方は楽でいいや。あいつのは大変だし」

少年はどこからか知らないがお酒を出した　それもとて度が高い
やつを：そしてそれを飲む

「人に強い度のお酒を飲むのを見られてはヒスルとか正直自分でも
よくわからないな。……さあ、始めよう。余の強さ御披露目会を
……」

そう少年は少し変わった口調で言った

奴らも苛立ちがピークにきたのか少年目掛けて引き金を引いた

「悪くない……だが余には届かんよ」

少年は信じられないが弾を見切って避けている

相手も驚いたのか一瞬手が止まった

その一瞬の内に少年はジャケットから拳銃を取り出して6発　撃った
すると、奴らの手から銃が落ちた

「さあ、どうする？　余のほうが有利だ。　ふむ、お前たちに選択
肢をやろう。

1つはこのまま戦いを続ける。

もう1つはその子供達を置いてここから立ち去る。

さあ、選べ。余は愚か者は嫌いだ。」

男たちは1人、1人　と立ち去っていった　「ヤツらは賢いな」

笑みを浮かべ少年は言った

「さて、この口調は好きではない。

戻るか……」

少年はまたまたどこからかミネラルウォーターを取り出し口にした

「……ふう、やっぱりヒステリックモードはだるいな。

さて、子供達とは」　子供達のところに歩み寄り「大丈夫？」や「
怪我はない？」とか聞いている

僕はとりあえず

「いまのは何だったんだ。それに君は何者だ」と聞いた

少年は

「今のは俺の潜在能力ってやつで、俺はある組織の一員さ。とりあえず子供たちの村に向かおう。話は歩きながらも出来る」僕と少年と子供たちは歩き出した

僕は話を聞いてる途中、驚きの連続だった

少年はここに任務できたと云った この年でなんでそんな事してるんだ？と聞くと

「俺はさあ、昔に命を狙われたんだ。その時爺さんが、父さんが、母さんが命を落としながらも俺を助けてくれた。

そんなこの命を役立てたいんだ。この世の苦しんでる人を救いたい。例え偽善だと言われても俺は助け続ける。最後までな」と答えた

僕は少年の大きさを感じた

あとは、吸血鬼の家で女の子を助けたり、その吸血鬼の娘の力が暴走した時雷切という刀を犠牲にして助けたら何故か知らないがやらと絡んできたり、ある家の男装していた少女の悩みを聞いてアドバイスしたり、イ・ウーという大組織に喧嘩を売ったりなど、なかなか濃い……いや、普通は一つあるだけで凄いことなのだが

僕はそんな話を聞いてるうちに僕も人助けをしたいと思い始めていたそこで僕は

「僕も人助けがしたい。その組織に入らせてくれないか」

「うーん、覚悟はある。人に恨まれる覚悟は。死んでもいいという覚悟は。」　僕はそれに

「ああ、もう決めたんだ」「ならいい。それじゃあ一旦日本に戻ってくれ。1ヶ月に迎えにいくから」

「わかったよ。でも何故1ヶ月後に？　僕は独り身だからいつでもいいんだけど」

「1ヶ月後にわけあって日本に行くからな。その時に迎えに行く。わかったな」

そうこう話しているうちに村に着いた

「もう捕まったらいけないよ」

少年は子供たちを見送る　そしてバイクに跨った

「それじゃあ俺は行くよ。また1ヶ月後に会おう」

「最後に組織名と、君の名前を覚えてくれるかい？」

「組織名はねえ、黒く知恵ある鳥へレイブンだ。そして俺の名前は、天城智春へあまぎともはるゝそいじゃあね」

レイブンだって

あの大組織だったなんてあと天城ってのが何かしら引っかかる

「将来が不安になってきた」

僕はため息をついた

side out

「仕事は終わったよ。そういや新人が入るから集会の準備しといて。勝手だって？それが俺じゃないか。あと、俺は下っ端という設定で。なんでかって？面白いからだ。……ため息をつくとき幸せが逃げるぞ。誰のせいかって？知らない。」

あはは、そいじゃあね。またあとで」

少年は電話をきり空を見上げ

「1ヶ月後が楽しみだな」

笑みを浮かべながら呟いた

間章 第1 成長した少年と決意した青年（後書き）

今回からあと1、2話このオリキャラ目線で書くつもりです

あと主人公の名前ですが気づいているかもしれませんがちょっといい
じっています

ではまた会いましょう

間章 第2話 久しぶりの墓参りそしていざイギリスへ（前書き）

今回はオリキャラ目線だけでは無理があったので主人公目線も出しました

ではどうぞ

間章 第2話 久しぶりの墓参りそしていざイギリスへ

side Yuki

僕はふと目を覚ました。いまの時刻は何時だろう、枕元に置いてある携帯を開いた。今の時刻は：：6時半か、

僕は体を起こし汗ばんだ体を綺麗にするために風呂に入った。そして服を着て身支度を済ませ荷物をまとめて数日間お世話になったこの部屋を出る。チェックアウトをして僕はホテルをでた

あの日からちょうど1ヶ月後、ついにこの日がきた

僕は歩いて目的地に向けて歩き出す

「天城智春から来た手紙ではあと少しだな。しかしなぜこの場所なんだ？」

あの少年が指定してきたのはちょうど4年前にニュースになった場所だ。確か争いがおこってその時に何かしらで火がつき火事になったらしい。生存者は0で、

その時に流堂夫妻という有名な武偵の家族が死んだんだよな

そうこう考えているうちに目的地についた

まだ約束の8時には一時間早いせいか彼の姿は見えなかった。「まだ来てないか：：しかしなにもないな。うん？あっちに森があるな、暇だし行ってみるか」

そこはとても静かで落ち着ける所だった。僕は目を閉じ森に耳を傾けた。動物の鳴き声や木の葉の擦れる音、人の声：：えっ人の声？僕は人の声のする方へ歩いていった

少し歩くと森からでた。ここは小さな丘になっているらしい。奥の方に墓石と見られる物があり、その前に人がいた

side Tomoharu

「久しぶりなあ、ここにくるのも……」 いままで忙しかったからなあ、と思いつつ目の前の墓石をみる 誰か掃除でもしているのかあの時と変わらず綺麗なままだった。俺は持ってきた花をそれぞれの花に飾った

「やあ、みんな久しぶり。今まで行けなくてごめんね。少し忙しくてさ。俺は元気に過ごしてた……かな？」

まあいいや。まず報告しないとな。

俺さあ今、組織に入っている……入っているじゃあおかしいか、組織のトップなんだぜ。それも最初は小さかったがだんだんと大きくなって今では世間でも有名な大組織さ。あの日誓った時からずいぶんとたちまったが果たすことができたよ。俺はこれから道を進んでいく。失敗や苦労したり間違えたりするかもしれない。だが、俺は絶対に後悔はしたくない。だからさ、見ていてくれ、俺の、父さん、母さん、そして爺さん、あなた達が助けた命の生き様を。応援してくれ、俺が進んで行く茨の道を。

それじゃあね、今度はいつこれるか分からない、でも必ずここにもう一度来る。待っていてくれよな。じゃあ、お別れだ」 side out

少年はバイバイと言い墓に背を向けた。彼の者は誓う。この場所に、自らの家族に、自身の心に

side Yuki

墓の前にいる少年は何か話している よく聞こえないが「元気」「……大組織さ」

など言っているのが聞こえる あれは誰何だろう近くに行ってみよ

うかなとか思っ僕は彼に近づいていった

あと少しという所で僕は止まった 流石に気づかれるからね
ようやく彼の言葉が聞こえてきた

「俺はこれからも道を進んでいく。」

少年の強さのこもった声が聞こえる

「失敗や苦労したり間違えたりするかもしれない。だが、俺は絶対に後悔はしたくない。」

少年の決意のこもった声が聞こえる

「だからさ、見ていてくれ、俺の、父さん、母さん、そして爺さん、あなた達が助けた命の生き様を。応援してくれ、俺が選び進んで行くこの茨の道を。」

覚悟のこもった声でそう言った

僕のある日から決意した覚悟はたった3つの言葉だけで粉々に砕かれた。

少年の覚悟の強さ。 それは決してそこのやつが覚悟を語ってはいけない、と思うほどの強さを持っていた

そう彼の心は例えるなら剣。それもそんじよそこのなまくらじゃない、名剣だ。

その時だった僕の目になにか違和感を感じた。痛い、ものすごく痛い。僕は耐えることが出来ず意識を手放した……

なんなんだこれ……僕はみた。周りが赤く染まった丘を。そこには……

起きろ、起きろ、うん？うるさいな、なんだよ

「早く起きんかい。」

「うーん、はっ カバッ」

目の前には天城智春がいた。僕はもうやら気絶してたみたいだ、頭がズキズキする

「お前なんでこんな所で寝てるんだ？」

そう言われ少し考えてみる

「うーん、確か人の声が聞こえてそれでたどってきたらここに着いてそれで墓の目の前にいた人……あれ？あれはもしかして天城だったのか。まあそれで天城の言葉を聞いて君の覚悟の強さに驚かされた所で目が痛くなってる……」

「それで気絶したわけか。全く、あそこで待っておいって書いてたのに……。見られちゃったわけか」

彼は頭を掻きながら恥ずかしそうにそう言った

僕は彼の姿に感銘を受けたが馬鹿にはしていないので

「うん、とても感銘を受けたよ。」と言ってあげた

彼は視線をずらしそして

「ま、まあそ、そんなことより早く行こうぜ。」

僕はその前に聞きたかった

「ここは君の家族の墓なのか？」

「ああ、そうさ。俺の家族の墓だよ。それがどうかしたかい？」

「こんな所に墓があるのは流堂家しかない。君は流堂夫妻の息子さんかい？」

確かあのニュースでは子供の死体は見つからなかったといっていた、ならば彼は　「違うよ。俺は流堂夫妻の息子じゃない。」

少年の有無を言わせないといった言葉の強さに

「そうか。ごめんよ」

と言いつ彼は走って

「いや、いいよ。じゃあ本当に時間がやばいから行くよ」と言う

「わかったよ。だから置いてかないでくれるかい」彼の後ろ姿を見ながら走っていく

今日のみたあの丘のことを頭の中で考えながら……

「君は流堂夫妻の息子さんかい？」

あいつはそう聞いてきた 俺はあいつ頭がなかなかキレるなど思
いそして

「違うよ。俺は流堂夫妻の息子じゃない。」

と返した

もう流堂天智はいない。あの時あの場所で死んだんだ。

「そうか、ごめんよ。」

どうやら空気をよんだのかそれ以上聞いてくることはなかった 俺
は

「いや、いいよ。じゃあ本当に時間がやばいから行くよ」

そう言い走り出した 後ろから

「わかったよ。だから置いてかないでくれるかい」
なんて声が聞こえてくるが無視だ

「あいつがあんな事をきくから……」

俺は目に涙を浮かべてた

俺たちが走り出して10分後に空港についた

「チケットはあるの？」

「そんなのいるかよ」

俺たちはカウンターに向かった

「お客様、何かご用ですか？」

「ああ、人を救いにな」

「鴉の翼は？」

「世界を羽ばたき希望をもたらす」

「では、こちらにどうぞ」

俺たちは案内人についていく

「いまの会話はなんだい？」

「今のは暗号さ。こちらの人間かわかるようにするためにな」
なるほど、とやつは呟いている

「それよりあなたがなぜこっちに？」「それは用がありました。（あの指令を聞いてるだろ）あとは新人を迎えに」
案内人は分かったのか

「なるほど。」

それ以上は喋らなかった。そのおかげかやつは気づいていないようだ
「この扉を先に進むとあとはわかります。では」

俺たちは扉を開け先に進んでいく
すると目の前には飛行機。

「なんだここは？」

「いや、わかるだろ、飛行機乗り場だよ。《レイブン》の一員は無料、不検査で飛行機に乗れるのさ。まあ飛行機会社のやつが仲間だからなんだが……」

へえと言いながらやつは飛行機に乗った 《レイブン》用の席が4つある

その内の2つに座った

「でっこれはどこ行きなの？」

「これはイギリス行きさ」

「イギリス行き？まじですか」

「ああ、だから今は寝ておけ。着いたら派手に騒ぐからな」

「なにその言いよう？ちゃんと寝てよ」

やつは目を閉じた

そしてすぐに寝てしまった

「久しぶりだな、本部にもどるのも。みんな元気にしてるかな？」
俺はある事を考えながら目を閉じた

明日、無事に歓迎会が成功しますように……

間章 第2話 久しぶりの墓参りそしていざイギリスへ（後書き）

今回はオリキャラ目線onlyでいきたいです

また原作キャラを少しずつだしてかないとヤバし

この小説、ついにお気に入り登録数が100こえました。こんな駄文ですが見てくれる人がいて幸いです
では、次回お会いしましょう

キャラ設定（前書き）

今回は早いところ設定をいれておこうと思います書きました

オリキャラの設定も一応

キャラ設定

名前…御剣・I・クロウ（偽名として天城智春を使う）

年齢…14才

髪の色…黒髪だが実際は金髪

容姿…少し短めの髪に整った顔 目は翡翠色、身長は160cmくらい。容姿をキャラで例えるとテイルズのガイだと思えば大概あっている

性格…前よりもお気楽さがました。日常時はお気楽キャラ。しかしいざとなると頼りになる

能力…魔術（f a t e 以外も）、剣術、固有結界、???、

趣味…あれからほとんど変わらず

キャラ紹介

我らが主人公。あれから4年間、様々な経験を積み強くなった。魔力も格段にあがりいまはアーチャーレベル。また組織の長でもあり日々忙しい。最近の悩みは、たくさん電話がかかってきてうざったい事。

また、数年前にある物を手に入れており、いろんな魔術を使えるようになった。また慎重な面があり名前が有名なため初対面では必ず偽名を使う
まだ能力はです。最終目標は完璧なチート

名前…大谷結城〈おおたにゆうき〉

年齢…二十歳

髪の色…少し茶色がかかった黒

容姿…短めの髪の毛に普通な容姿。眼鏡をかけている

性格…少し弱気な性格。しかし決めた事は最後までやり通す。基本やさしいキャラ

能力…????

趣味…機械いじり、読書

キャラ紹介

天城智春に命を助けられて、自分も人々を助けたいと思い《レイブン》

に入りに行く。今は能力が使えないがいずれは…。
また機械にめっぽう強い。

一応戦いは出来ません。サポートです。最近の悩み事は、自分は無事に生きれるかという事。

作者が作ったオリキャラです。

このキャラにはいろいろと役にたってもらいます。しかし後編で出

番があるかは作者の心しだい（笑）。

キャラ設定（後書き）

主人公は4年間にいろいろしてました

また過去編的な書こうか迷ってます

では、さようなら

間章 第3話 L e t、s誘拐 そしてついに到着（前書き）

ハロハロー

明日から玉野に研修かあゝ

と言うわけで明日、明後日は投稿は難しいです

ではどうぞゝ

間章 第3話 Let's 誘拐 そしてついに到着

side Yuki

僕は夢を見ている。なんで分かるかって？ それは現実じゃああり得ないから。考えてごらんよ。周りは赤に染まり地面に数え切れないほどの剣が刺さっている風景が現実にあると思うかい？ 思わないだろ

ここは前にも夢でみたことがある ここは何なんだ？僕は悲しい景色だなど思いながら歩く：：一本の剣に触るところで

「はっ、夢から覚めたのか」
起きたみたいだ

僕は天城の方を見る。彼はまだ寝ているようだ。彼の幸せそうな寝顔を見て彼はまだ少年なんだと思う。僕よりも4、5歳年下の筈なのに、僕よりもずっと大人に見える時が多々ある。彼は苦しくないのだろうか、辛くはないのだろうか。普通の子は武偵校に行ったとしても青春を謳歌している。それなのに彼は人助け、彼はおかしいんじゃないだろうか。

「君は、その体にどれだけの物を背負ってるんだい？」
僕は寝ている彼に呟いた
すると

「俺を救ってくれた人達の命をさ」
と彼は答えた

彼は起きていたらしい。
しかし、救ってくれた人の命かあ それはどんなに重いんだろう
決して軽くはないそれをあと数人分。彼は押しつぶされないのだろうか。

僕がそうこう考えているうちに飛行機はイギリスに着いた。
「ところでイギリスに本拠地はあるのかい？」

「いや、ないよ。ここは本拠地を構えるには少々不都合だね。」

「では、なぜここに？」 「いやあ、マンチェスター武偵校に用がな。人を1人連れていかないと」

人？誰だろう

「まあ、一応俺らの仲間かな？」

彼は僕の考えを読んだかのように

「読んだけどな」

えっ、そんなわけあるはずな「いわけないんだな」……

嘘だ！？こんなの嘘に決まってる

「まあ、冗談だがな」

と彼は言った。いやいや絶対読んだでしょ。タイミングが良すぎるもん

「まったくの偶然さ」

……僕はこの事にふれないことにした



僕達はあれから乗り物を使いマンチェスターに来た

しかし彼の凄さには驚かされてばかりだ。まさか英語がペラペラだなんて。僕は会話くらいしか出来ないのに……。 「おい、もうマンチェスター武偵校に着くぞ」

前をあるく彼の声が聞こえてくる。少し前方に大きな建物が見える

多分あれがマンチェスター武偵校だろう

「おい、あゝええっと名前聞いてなかったな」

「今さらかよっ。僕の名前は太谷結城」

「へえ、なら結城、この服に着替えろ」

僕は呼び捨てかよ、と思いつつ渡された服に着替える

「これって、明らかに強盗だよな？」

「そうだな、今からする事に必要なんだ。」

僕達の恰好は目出し帽に黒い服といういかにも犯罪しますよみたいな服だった。じゃあ行くぞというかけ声とともに僕達は敷地に入った



敷地には見たかぎり誰もいなかった。そして天城智春は校舎に向かって

「エル・ワトソン」。出て来いやああ」

と叫んだ。僕は逃げ出したくなった。しかし肩を掴まれ：ちくし
よー

彼が叫んで数分、校舎から黒いサングラスをつけた厳ついお兄さん
達が現れた

警備員だと思う：：：警備員だよね？

警備員？はこちらに銃を向けてきて何か英語を口にしたかと思うと
銃をこちらに向けてきた

「おいおい、銃を向けてきたぞ。どうするんだ！？」

そう言った僕の肩に手をおいて彼は進んでいく

「だるいなあ、あんまりこれしたくないんだよな。まあいいや。」

彼はそう言い英語で警備員を挑発。警備員たちが銃の引き金を引く

「《I am the bone of my sword》」

彼の手に花卉のような盾？が出て来た。その盾？は銃弾を防いでい
く

「鉛弾ごときでこの盾が壊せると思うな」

そして警備員たちの弾はきれたのか撃ってこない

「じゃあ、そろそろやるか——トレース・オン」

盾が消えたかと思うと次は一振りの剣がでてきた

「いくぞ、——真名解放クラウ・ソラス——」

彼が何かを言ったかと思うと彼は持っていた剣を鞘から抜く、する
と目があけられないほどの光でその剣は光った。

僕は眩しさのあまり目を閉じた

僕が目を開けた時にはすでに警備員たちは彼に倒されていた「やっぱり弱いなあ（笑）。」
やはり彼はすごい。

あれ、校舎から誰か出て来たぞ

校舎から出てきたのは貴公子という言葉がぴったりの少年だった

「僕になんのようだ？」

「やっと出てきたか、とりあえず俺らと来てもらうぞ。」

「分かった。だから他のみんなに危害は加えないでくれ。」

「いいだろう。よし、そこ、早くいくぞ」

彼は僕に声をかけてきたので僕は彼と一緒に学校を出た



あれから彼に連れて来られた少年は何も話さない。なんで連れて来たんだろうと思っていると彼は細い路地裏に入った

「ここならいいか。おいエル、もういいぞ」

彼は少年に声をかける

「うん、ここならいいね。久しぶりだね、クロウ」

クロウ？誰だそれ

「ああ、久しいなエル、エル・ワトソン」

少年の名前はエル・ワトソンというのか：：ワトソンだって！？

あのシャーロック・ホームズの相方だったあのワトソン？

「ああ、エルは正真正銘ワトソンの子孫だ」

凄い血筋だな！そして彼はまた考えを読んだ：：

「あれ、ならなんでワトソン君を誘拐したみたいにしたんだ？」

僕は疑問に思った事を言った

「それはな、いろんな理由が多少あるが、大半の理由は：：」 「理由は：：？」

「おもしろいからだ」

なんだよそれ、そのためだけにあれだけの事をするなんて酔狂すぎるよ

「あとな、エルはな、女の子だぞ」

「えっ、ええ」

マジすか、と僕は大声で叫びたかったが路地裏にきたのは何か事情があるのだろうと思いやめた

「まあ、小さな事は気にせずさっさと行くか」

全然小さな事ではないけど話が進まないなので僕はスルーした

「そうそう、なんでここに来たんだい？」

「それは移動するためだ」

移動？こんな何もない路地裏に移動手段なんてあるのか？

彼にそう聞こうとしてやめた。彼は目を閉じて集中している

「よし、いくか。」彼は首元から指輪のついたネックレスを外した。

それを鎖の部分を持ち下に垂らす

「さあ、みんな俺に近寄れ。じゃあ行くぞ。」

――我は悪魔を肯定する者なり

我は神を非難する者、天使を非難する者

我は汝らの力を欲する 汝らの知識を欲する

我は汝らの契約者なり 我は汝らの主なり

ソロモンが末孫、御剣クロウが命じる、

我に力を貸したまえ

「なんだエル、顔を真っ赤にして。風邪か？」

「違うよ。この唐変木……。」

「うん？最後の部分が聞こえなかったんだが」

「気にしないでっ。！」

「あっああ、分かった」

唐変木な一面を見せるクロウに苦勞するワトソン。道は長いぞ

間章 第3話 L e t、s誘拐 そしてついに到着（後書き）

どうだったでしょう

ちよつと無理やり感ありますが原作キャラ出た 作者はワトソンは好きです まあ一番は理子ですが

友人にヴァイシュに誘われやろうか迷っている今日この頃

間章第4話 深まる謎と歓迎会 前編（前書き）

こんにちは

今回は書き方を自分なりに変えてみました

感想に書いてあったので

では、どうぞ

間章第4話 深まる謎と歓迎会 前編

「あれ？これが本拠地？」

大谷結城はあ然としながらそう呟いた。しかし彼がそう考えるのも無理はない。彼の目の前にあるのは小屋、それも小さな。

組織は裏の世界だけでなく表の世界でも有名だ。レイブンは世界中を飛び回り人々を助けるから噂が広がり世界中の人が知っている。

しかし、組織自体は謎に包まれている。分かるのはレイブンの者は皆、並みの武偵じゃあ相手にならないほどの力を持っていること。あとリーダーの姿が知られているだけ。しかし組織名だけならとてもビックネームだ

そんな組織の本拠地が小屋なんて誰が想像出来るだろう？彼の考えは決しておかしくない

「ああ、これが本拠地だ」

御剣クロウはそう答えた。（彼の名前は正式には御剣・I・クロウだがいつもは御剣クロウにしている）

side Yuki

これがレイブンの本拠地なわけない！絶対に天城は嘘をついている。

僕はそう考えているうちにふと思い出した事があった

ワトソンが言う名前が僕が知っている名前と違うということだ。

確かクロウだったかな？これは彼に聞かないとな。まあ、今聞かないといけないのは目の前の建物が本拠地かどうかだ
あいつはウソをついてるかもしれないからな。

「あれが本拠地なわけないよな？」

「いや、あれが本拠地さ。」

彼の真剣な顔つきをみるかぎり嘘はついていないと思う……。

ならやっぱりあれが本拠地かな？

僕は考えに考えていたのでワトソンが笑っていたのに気づかなかつた

s i d e W a t s o n

僕はあの新人かなあ？が本気で考えているのを見てつい笑ってしまった。

「クロウ、まだ教えてあげないの？」

クロウはイタズラをしている子供みたいな笑顔でこちらに振り向き

「だっておもしろいじゃん。もう少し楽しんでから教えるよ」

「そっそうなんだあ」

僕は彼の無邪気な笑顔で少し声が上擦っちゃった。
あぶない、あぶない

「しかし、クロウはいつも笑っているよねえ」

僕は恥ずかしさをごまかすために話を変えた

「ああ、それが俺と師匠との約束だからね」

彼は遠くを見ながらそう言った

時々話に出てくる師匠という単語。

彼はこの単語を言葉にするたび少し哀しげに笑う。だから僕はあまり触れないようにしている。

「そうなんだね。あつ、みんな待っているから早く行こう」

「そうだな。じゃあ、結城に本当の事を教えにいくか」

彼はあの新人の所に走って行った。

御剣クロウ、彼は僕と同じ年とは思えないほど大人びてる

彼はどのような道を通ってきたのか知りたいけど教えてくれるのを
まとう。

彼が僕に心をひらいてくれるように努力しなきゃね。彼が僕の悩み

を解決してくれたように……

「おいしいエル、行くよ。」

「分かったよ。今行くよ。」

僕は彼に向かって歩みを進めた

side Yuki

やっぱり彼は嘘をついている！という結論が自分の頭の中で出た。

「天城、やっぱり嘘だr……あれ？いないなあ」

僕は首を傾げた。そして周りを見てみるとワトソンと一緒にいた。
なにやら話しているので声をかけるのはやめておく

はあく改めて今日を振り返ってみるといろいろあったな。

武偵校に喧嘩を売り、いきなり瞬間移動したり、まずありえないな。
また、それが楽しいと思っている僕が一番ありえない。こんな日々
を過ごせるならレイブンもいいな。

「しかし、簡単な道ではないぞ。つらい時、苦しい時なんかたくさんある。それでもいいのか？」

いつの間にやら天城が横にいた。どうやら声にでていたみたいだ

「ああ、僕は進むと決めたんだ。だからいいのさ」

「そうかあゝ結城、こんな言葉がある。『義を見てせざるは勇無きなり』」

これは人の道として当然な事と知りながら、やらないことは勇気がないという意味だが、俺はそんな人にはなりたくないお前もだろ？だからお前も一緒に歩もう。義のある道を……」

「いきなりどうしたんだい？」

「お前の覚悟が伝わったって事さ。では、そろそろ行こうか。」

おーいエルと彼は叫ぶ

僕は認められた気がして嬉しかった。

彼が認めてくれるとは思わなかったから。

「おい、お前も早くこい」

「分かったよ。行くよ。」

僕は彼の元に行った

s i d e o u t

クロウの元に2人がやってきた。

「よし、じゃあ入るか」

「本当にここが本拠地？」

「ああ、本拠地さ、まあ、入り口だが」

クロウは笑ってそう言った

「えっ。なあんだ」

結城は納得したような顔で言う

「もういいの、クロウ？」

「ああ、こいつの覚悟が分かったしな。だから俺の名前を教えよう。俺の名前は御剣・I・クロウだ。クロウと呼んでくれ。」

「今までの名前は？」

「それは偽名さ。いろいろあるんでね」

「詮索はやめといたほうがいいよね？」

クロウは首を縦にふる

「早く入ろうよ。」

ワトソンが空気を変えようとドアの前に行って言った

クロウは頷くと進む。結城もそれについてゆく
そしてドアを開けると階段が正面にあり、下に降りれるようになった

ていた。

3人は無言で階段を下りていく。そしてついに一番下についた

side Yuki

この先に本拠地があるのかあ。なんだか怖くなってきたな。しかし、一応大人だし、彼らに恥ずかしい所をみせるわけにはいかない。

「さあ、ここがレイブンの本拠地だ。」

クロウが指差しながら言った。彼が差している方をみると大きな扉がある。

「心の準備はいい？じゃあ開けるよ」

クロウは扉を開けていく。僕は心を落ち着かせながら開いていく扉の先に進んだ

中は真っ暗だ。なにも見えない。クロウがまた嘘をついたのかと思ひ聞こうとして

「みんな、ただいま帰ってきたぜ。さあ、新人歓迎会の始まりだ！」

クロウがそう叫んだかと思うといきなり明るくなり、目の前に100人くらいの人達が僕の目に映った

僕は驚いているとクロウに引っ張られて舞台？に立たされた。舞台？にはもう1人誰かいた。クロウと同じ年くらいの銀髪の女の子だ。

「ようこそレイブンへ、まずは自己紹介をしておおう」

「ようこそレイブンへ、まずは自己紹介をしてもらおう」

僕は舞台の中心にたち自己紹介をする

「名前は、大谷結城。年は二十歳。これからよろしくお願いします。」

多くの拍手が聞こえてきて僕は力を抜いた……。

「大谷、こちらもお前を歓迎しよう。」

僕は緊張がとけたので聞きたい事を聞いてみた

「君がレイブンのリーダーなのかい？」

「いや、私は副長でね。あいにくクソ団長は来れなくてね。本当にあのバカは……」

そういいながら女の子は何故かクロウをにらんでいる。しかしクロウは何もないかのように前を向いている。はあくリーダーには会えないのか。レイブンのリーダー、それはすごいらしい。容姿は金髪でかっこいいらしいし、確か剣の達人らしい。あとサングラスがトレードマークと聞いたこともある

「さて、自己紹介も済んだことだしパーティーを始めるか」

女の子はそういうと他の人達は一斉に騒ぎだしご飯を食べたり、話をしたりしている

そういえば彼女の名前を聞いてない

「あの、君の名前は？」

「あつ、自己紹介を忘れてたな。私の名前は沢村キリカだ。よろし
「いつまでそんな演技をしてんだよ。」ぶう、いいじゃん。騙し
てこそ私のでしょ。クロウは私の事が嫌いなのか？」

キリカは瞳を潤ませてそう聞く

「うん、嫌いだよ」

しかしクロウは笑顔でそう答えた

「クロウの馬鹿。」

そういいながらキリカはどこかに走っていった

副長がこれで大丈夫なのかな？ 僕は急に心配になった

side out

物語がついに動き始める 少年たちがなにを行うかはまた次の話に

間章第4話 深まる謎と歓迎会 前編（後書き）

そろそろバトルが入りたいので展開が急な部分もありますがご了承ください

あと今回だしたキャラはある小説から名前も性格も同じでだしたの
でオリキャラじゃありません

間章第5話 壊れている者たちと歓迎会 後編（前書き）

今回は特には……

まあ軽く読んでください

間章第5話 壊れている者たちと歓迎会 後編

大谷結城の自己紹介が終わり、始まった歓迎会は盛り上がっていた。

ある者達は酒の飲み比べ、

ある者達は口から火をはいたり、玉乗りをしたりなど大道芸をし始めたり

ある者達は舞台上で歌を歌ったり、踊ったり

ある者達は自慢話を大声でしたり

彼、大谷結城から見ればなぜこんなにお祭り騒ぎをしているのかはわからなかった。それは当然だろう、彼はまだ入ったばかりだからだ。

しかし彼らは知っている、いつ誰が死んでいくか分からないことを、次にみんなで宴が開けるか分からないことを。

だから彼らは騒ぐ。飲む、遊ぶ、歌う、踊る、話す。
この宴で思い出をつくろうと。

（第5話壊れた者たちと歓迎会）

side Yuki

なんだこのお祭り騒ぎは？僕は料理を取りながら思った
僕はこのお祭り騒ぎに戸惑っていた。なぜかって？それはレイブ
ンのイメージが現実と違ったからだ

「どうだ、楽しんでるか？」

天城：…いや、御剣クロウが声を掛けてきた

「まあまあかな。クロウ、いつもこんな感じなのかい？」

「ああ、こんな感じだぞ。どうかしたのか？」

「レイブンがこんな騒ぐなんて思わなかった」

「イメージと違うと言いたげだな」

「もっとみんな誠実な人かと。だって人を救うなんて仕事している
から」「うーん、それは違うな。あとで俺の所にこい、説明してや
る」

「分かったよ、もう少し食べてからいくよ」

じゃあな、と言いながらクロウは去っていった
あっ、あっちの料理も美味しそうだな。僕は少し歩いて違う料理

を食べ始めた……

「おい、お前が大谷結城ってやつか？」

「うん、そうだけど……」

僕がここら一帯の料理をコンプリート寸前のところで赤髪の青年が話しかけてきた

「だよな。今日からよろしく」

「こちらこそよろしく」

うん、チャライ。僕はそう思った
しかし、話しやすいのですねに仲良くなった。名前はシゲルと言うらしい。そうやって話していると

「いきなりで悪いんだがなんでここに入ったんだ？」

と聞いてきた。

「僕はクロウの姿に憧れて入ったんだ。シゲルは？」

「あ、俺はクロウに命を救われてな。」

シゲルは笑顔でそういった。彼の表情が歪んだように見えたが気のせいだったのかな……

「あつ僕、クロウのところに行かないと。じゃあ、また後で」

僕はクロウの名前を出して会う約束をしていたのを思いだした

「ああ、また後で」

シゲルを後にして僕はクロウのところに向かった……

「はあ、クロウに懂れてか。俺もそんな理由が良かったな……」

彼の声は結城には聞こえなかった

「どこだろう？」

僕は只今絶賛お探し中です。しかし、見つからないなあ。

探して数分、ついに僕はクロウをついに見つけた。

「クロウ。やっと見つけた」

「よっ。探したのか。悪いことをしたなあ。」

「いいよいいよ。でっ話とは？」

「まあとりあえず外に出ようぜ」

クロウの言葉に僕は頷いて2人で外にでた。

辺りに灯りはないため空の星はいつも以上に輝いてみえた。夜風が僕らの身体に吹きつける。なかなかいい風景だ

「さて、本題に入るとしよう。確かレイブンの奴らは誠実だと思っ
てたんだっけ？」

「うん、人を救うなんて仕事をしているからね」クロウは真面目な顔つきでこちらを向いた。星の光で彼の顔は照らされている

「これはいい機会だ。1つ問おう。普通の人が一番大切にするものはなんだ？」

僕は突然の問いに戸惑ったが

「家族か、友人かな？」

「よく考えてみる。自分が一番大切にするのは自分自身だ。」

そう言われて僕気づいた、確かに人は自身が一番だと

「分かったみたいだな。そう普通人は自身がかわいい。自分が生きてないと他の大切なものは守れないからな」

だがなとクロウは続ける

「普通じゃない人はな自身の命なんてほとんど価値がないんだ。それよりも大事な事、物があるからな」
命よりも大事な事って？

「まあ、分からないだろう。それが普通だ。そいつらにとって大事な事は……」

大事な事は？

「――自身の理想、自身の目標だ」

「なんだ。それなら僕も命をかけれるよ」

クロウは少し寂しげに笑うと

「お前は大丈夫だ。俺らのように壊れてない」

どういった意味か解らなかった

「解せないだろ。それはそうだ。これは壊れてない人には分からないからな」

……クロウは言う

「俺たちはな命をかけるなんて使わないんだ、いや使えないか。なんたって俺たちは命の重みが紙切れ並みなんだ。」

「それってつまり……」

「そう、俺たちは死を畏れてないんだ。死というものの感覚が曖昧なんだ。だからこそ壊れている。自身より他人を救う事のほうが大切なやつなんて壊れている」

僕はその言葉に何を返したらいいのか分からなかった……

彼らはあまりにも危険な存在だ　いつ逝ってしまうかわからない。そう自分の命の大切さが希薄だから。

「恐いだろ？　いつころっと逝くかわからない。だから俺らは騒ぐ。自分に少しでも関心がもてるように。命を大切にしようと思えるように」

「レイブンはな、壊れた者たちが多く集まるから裏ではな「道化な鴉」とよばれているんだ。人の命を救うという理由で自分自身の存在を偽っているからだそうだ」

「道化な鴉……」

「うまいと思わないか？　俺はな当たりだと思ってる。カラスってのは昔から忌み嫌われている存在だ。そのカラスが人を助けようとし

てるんだ。これが道化以外なんていうんだ」

クロウは話し続ける、顔は空に雲がかかっていて見えない、声は冷淡だ

「でもな、俺らは道化と言われても、偽善者と呼ばれても構わない。俺達は信じてるから。」

俺達の道化で救われる人はいるはず、俺達の偽善で助かる人はいるはずと」

自分達を信じる……それはどんなに簡単な言葉で重い言葉なのだろう、それをちゃんと使えるのはあまりいない

「なあ、誰が言ったか忘れたがこんな言葉がある……『意気地の無い人や、なんとかなるさと思って引っ込んでいるような人が、世の中を変えたためしはない。』ってな。」

……お前は覚悟があるか。最後に聞く、お前はこの道を進んで行くのか？」

クロウの声は真剣そのものだ。彼は多分心配してくれてるのだろう。全く人を見くびりすぎだよ

「クロウ、僕はここまできて止まるような男と思われていたのが一番つらいよ。――僕はこの道を進む――」

僕の覚悟は決まっている。それにあんな話を聞いてひけるわけない。

「そうか、そうか。ははっ、あはは。そうだよな。よし、帰って飲むか。」

「まだ子供だからだめだよ」

知るか、知るかと言いながら彼は帰っていく

雲がきれていく、月と星が徐々にでてくる

「おい、早くこいよ」

そういつて振り返った彼の顔は月と星の光で輝いてみえた……

間章第5話 壊れている者たちと歓迎会 後編（後書き）

どうでしたか？

皆様のおかげでPV7万超え、ユニーク1万超えました
ありがとうございます これからもよろしく願いします

間章第6話 解かれる謎 そしてクロウの怒り（前書き）

こんばんわ

今回は展開が早いかと思いますが見てくれれば幸いです

少しシリアス入ります

間章第6話 解かれる謎 そしてクロウの怒り

あれからクロウと結城はホーム（レイブンの仲間がきめた本拠地の名前、ようするに、家Ⅱ本拠地だからホーム）に戻り、シゲルを含むほかの奴らと一緒に騒ぎ（結局クロウは結城に止められお酒を飲むことはできなかった）いつの間にか寝ていた

この話はそこから始まる恋愛ファンタジーである……

1回でいいからこの始まりやってみたかったですww
ではお楽しみください

↓第7話 解かれる謎そしてクロウの怒り↓

side Kuro

やあ、皆さん久しぶりです。

えっ、誰かって？

イヤだなあ、忘れないでくださいよ。

この作品の主人公です（笑）

全く作者は下手だから俺視線が出るのに時間がかかった……
：もう少し出番遅らす？……………

い、いやだなあ作者さん。文句なんてありません、ええ、ありませんとも。だから、だから出番を……

そんなに欲しいのかだって？　もしかして作者様、僕に出番をくれ
「だが、断る！！ww」……チクショー

「では、始まります。どうぞ」

（注）・これは本編とは全く関係ありません。どうぞ気にせずお読みください

side Yuki

「うーん、ここはどこだ？　痛っ」

……体が痛いなあ、なんでだ？　確か昨日はレイブンの本拠地にきて、自己紹介していろいろな人に会って、クロウの話を聞いて、そのあとみんなでドンチャン騒ぎして……そこから記憶がない

分かったぞ！

あのあと、みんなが寝始めたから、僕もつられてその場に寝たんだ。

僕はとりあえず起きてみた。すると何人かはまだ寝てた。シゲルとあとは、博士とてる坊か……

しかしクロウの姿はない。

僕はクロウを探しに歩き始めた……

「以外と広いなあ」

まだ来たばかりの僕はどこを探せばいいのか分からなかった。
というか広すぎでしょ！ 廊下を歩いて数10分経つけど未だ先が見えない……

「あつ、大谷結城くんだよね？」

「ひゃいっ!!」

いきなりかけられた声についつい声の上擦ってしまった

「あはは、面白い声だね。」

「いきなりだから驚いたんですよ。確か沢村キリカさんだったよね？」

「ごめん、ごめん。それとキリカでいいよ。それで君はさっきから何してるの？」

「クロウを探してるんだよ。どこにいるか知らない？」

「クロウなら外にいると思うよ。今日は……あれだから」

僕はあれがとても気になって聞いてみた

「あれってなに？」

キリカは顔をしかめ、うーんと唸っていたが何か決まったらしく唸るのをやめた

「今日はね、クロウのお師匠さんの命日なの」

「クロウのお師匠？ クロウに師匠なんていたの？」

初耳だ、まあ出会ったのが最近だからね

「うん、いたんだ。詳しい話は私からは話せないけど……。クロウを探すんだったら外に出て右に行ったらいいよ。墓が見えてくるから」

そこにクロウはいるはずとキリカは言った。

「それじゃあね。すぐわかるから」

「ありがとう。頑張ってみるよ」

僕はとりあえず外に出てみることにした

side out

「ふう、よし、やるか」

ここは島の端っこにある明らかに人の手によって作られた小さな丘。そこに1つぽつんと墓石があり、その前に少年の姿があった。少年は頭の上にサングラスを乗っけている。

手には、桶と花、菊の花を束にして持っている。

少年は花を飾り、水を入れた。

そして懷に手を入れるとお酒……それもウイスキーを取り出し花の横に置く

「これでいいかな、師匠？」

少年は誰にでもなく話す

「師匠、あなたが逝ってから2年が経ちますね。あなたと俺で作ったレイブンは順調です。あの時俺とあなただけだった組織が今では大組織ですよ。」

まったく誰が予想出来たものやら。そういえばつい最近、新人が1人入ったんですよ。ちょうど俺が仕事に行ってた時に命をかけて子

供を守ろうとした青年で、決してかなう相手じゃないのに行動をする勇敢な奴です。そいつはね……」

少年は楽しげに話していく。まるで誰かと話しているように　するといきなり

「クロウウー。大変なんだ。」

大谷結城が走ってきた。

side Yuki

やばいクロウに早く伝えないと、あついた

「クロオオー。ハア、ハア、大変なんだ！」

「どうしたんだ。急に」

「敵がきたんだ。ここらへんにくるらしいから、クロウに伝えろつて。」

数分前――

よし、クロウの場所も分かったし行くとするか

僕は走りはじめ外に行こうとした時けたたましく警報音が鳴った。

「敵襲だ。イーターどもが来たぞ。」

イーター？　よくわからないが敵がきたのは分かった。僕はどうす

れば？

「おい、ゆうき」

「シゲルか、敵襲ってどこに？」

「島の端っここらくるらしいぜ。よかったらクロウに伝えてくれな
いか？ やつの場所が敵がくる地点らしいから。」

「分かった。急いで伝えるよ。でもクロウ1人で勝てるの？」

「勝てるさ。……まったく、そろそろ気づきな」

「????、まあ行ってくる」

――――

ということがあったんだ。クロウは

「ちっ、今日来るか。今日来るなんてよほど死にたいらしいな。」

珍しく苛立っていた。あれ？ 髪の毛の色が……気のせいかな

そんな事を考えていると空から何か降ってきた。あれはゾンビ？
まさにその表現が似合う容姿だ。

「もう来たか。今日は遊びはなしだ」

クロウはそう言う。髪が金色になっていた。そしてどこから取り出したのか赤い外套を着ている。まるで噂のレイブンのリーダーのよ

うな格好……うん？　そういえばクロウは剣を使う、それにあのサングラス。シゲルの言ったあの言葉がこの事ならつじつまがあう。まさかクロウがレイブンのリーダー……

クロウは双剣をつかいゾンビを倒していく。双剣で斬りつけ、背後の敵には足をつかい相手蹴飛ばしたり、しかしゾンビたちは数が多くなかなか終わらせることができない。

「ああ、だるい。もう終わらせよ」

《I am the bone of my sword》

――一体は剣で出来ている

彼は膝をつき詩を唄う

《Steel is my body, and fire is my blood》

血潮は鉄で、心は硝子

“その唄ひどく悲しい”

《I have created over a thousand blades》

幾たびの戦場を超えて不敗

“決して意味は分らない、けれど”

《Unknown to Death. Nor saved to Life》

ただ一度の敗北もなく、ただの一度も救われない

何故だか分からないが、寂しい、そう感じさせる

《Have withstood pain to create many weapons, running down all times》

担い手はただ独り、剣の丘で涙を流す

これは彼だけの詩なのだろう

《I have no regrets. This is the only path》

だとすれば、この生涯に意味は必要なし

これは彼の人生なのだろう、彼の生きた詞、そう思った……

《So, my whole life was” unlimited blade works.”》

そう、この身体は無数の剣で出来ていた――

彼が唄い終わった瞬間、世界が赤く染まった――

僕はあの時のように目が痛くなってきた。これは見覚えが……そして僕は気絶した。

僕が目を覚ますとクロウが横に座ってた。辺りにはなににもいない。どうやら敵を倒したみたいだ。まだクロウは僕が目を覚ました事に気づいていないのか何か呟いている

「……アーチャー、俺もお前のようになんのかな？ アレを使う度に思うんだ。人を助けていく末路はどうるんだろってな」

クロウの声は若干震えている

「士郎はどうするのかな。あいつは恐くないのか？ 将来のなれはて、自身の末路を見て。いや、あいつなら恐くても進むだろうな。」

クロウの声に力が入ってくる

「なら、あいつの兄である俺も恐がってちゃあいけないな。」

そう言いクロウは立った

「道に迷うこともあったが、それは人々にとって、もともと本道というものが存在しないからのことだった」と誰かも言っていたな。人はみな、人と違う事をするのが恐い。しかし、思い切ってチャレンジする事。これが大切な事なんだ。なら、俺は自分の未来を変えてみせる！！」

クロウは呟き終わると僕を叩いた。

僕はいま起きたように演技した。

「なんだい？まだ眠い」

「もう終わったよ。少し待っててくれ。」

クロウは墓に向かって歩き出す

side out

「すみません、すこし野暮用がありましたね。言いたい事だけいます。時間がないので。

師匠、俺はあなたを尊敬していました。あなたの生き方に憧れていました。あなたがいたからこそ俺は今、ここにいます。まだ何も出来なかった、いや力があったがそれだけの無力な子供から成長する事が出来た。夢を1つ叶える事ができた

だからこそ師匠がやり遂げる事が出来なかった夢を今度は僕が叶えましょう、俺の夢とともに。

このサンダラスはその証です。あなたを共に連れて行くという……。

」

少年は語る、自身の覚悟を。自分の尊敬する者の夢とともに叶えてやるという誓いを。

「それがこんな俺が出来る唯一の恩返しです。そんな誓いをして大丈夫かって思ってます？大丈夫ですよ。

師匠、こんな言葉を知っていますか？『夢を語ろう、夢を実現するために。』

これはある人が言った言葉なんですが。俺はこの言葉通り夢を語り夢を実現させてみせます。

師匠、もうここに来ることはあまりないでしょう。

もし次に俺が来るときは夢を実現させた時です。

必ず、必ず実現させてみせます。

最後に師匠、あなたの日記をね偶然見つけました。

俺はね、それを見て本当に俺はバカだと思いましたよ。そしてやっと最期の言葉の意味が分かりました

もう手遅れでしょう。でもあなたの気持ちに答えておきます、この花を使ってね。

それじゃあ師匠、さようなら。

……あなたの気持ちにもっと早く気づきたかった。」

少年は飾った花を一度見てふと笑った。そして願った。遠い彼女に伝わりますように……。

「行くぞ、結城。報告しないとな」

結城はその時見た。若きリーダーの頬に流れる一粒の雫を……

結城は何も言わず彼に従う。

彼らが去った丘には数輪の菊の花が揺れている。彼が飾った菊はスプレー菊というものであった……
スプレー菊の花言葉は

『あなたを愛している』

間章第6話 解かれる謎 そしてクロウの怒り（後書き）

どうでしたか。

このままオリジナルを続けてもいいのですが原作介入をした方がいいかな？

どっちにするか迷っているので意見よろしくお願いします

間章 完結編 いざ日本へ（前書き）

こんにちは

ずいぶん遅れてしまいました

なかなか案がまとまらなかったんですよ

ではどうぞ

間章 完結編 いざ日本へ

「クロウ、もう行っちゃうんだね」

「ああ、もう行くよ」

時刻は朝方5時くらいだろうか、まだ辺りは少し暗い 潮風が吹き抜けてゆく

そんな中、2人の者が話している。1人は20代前半の男。もう1人は15歳くらいの青年だ

「しかし日本かぁ。懐かしいなあ」

「ははっ、結城はもうかなりの間帰ってないもんな」

「そう、半年だったかな？あっという間だったね」

男はふと目を細めた

過去を振り返っているようだ

「まったくだ。時は瞬く間に経っている。」

「この半年間、ホントに大変だったよ」

男は顔をしかめて言った。

青年も苦笑しながら

「あれは大変だったな。よくへこたれなかったな」
「まあ、時々休みがあったからね。それに……自分で決めた道だから」

そう言う男の顔は半年前とは別人のような凛々しい顔をしていた

「言うようになったな。ホント変わったよお前」

青年は顔を和ませて言う

「お前はもう一人前だよ。俺が認める」

「団長にそう言わせるとは僕もたいしたものだ。」

男の言葉に青年はふと昔を思い出す。

思い出した場面はあの英雄王と対決した時。

「確かあの時は俺が言ったんだっけな」

「いきなりどうしたんだい、クロウ？」

青年は気づかぬうちに口に出していたようだ

「なあに、昔の事を少しね。」

「へえ、いつも思うけどクロウって歳のわりに僕以上にいろんな経験や知識を知ってるよね。」

「そう言われると確かにな」

青年は一瞬ドキリッとしたが、顔に出すことなく答えた

「すごいよね。僕ももっと頑張らないと。」

「ははっ、お前はまず仕事をしなくちゃな。」

「そうだね。まあ余裕だよ。」

青年は親指を立ててニヤリとする

「調子にのりやがって。まあ、お前なら余裕だろうな。」

「…さて、そろそろ行くかな。お前も余計な事を起こさず頑張れよ」

青年はニヤニヤして言った

「な、なんの事だよ？」

「知ってんだぞ。お前がカレンさんと最近2人で「わああ、うるさい！」分かったよ。」

男の動揺は大きかった。

「僕よりクロウの方が心配だよ」

「なんで俺が？ なにかしたか？」

青年は心当たりがないのか表情1つ変えない

「あっ、そうかあ、クロウは鈍感だったね。」

「鈍感？どこがだよ。俺は銃弾にも反応できるから敏感だぞ」

「そういう意味じゃないんだよ。」

男は呆れたようにため息をついた

「ならどういう意味なんだ？ この半年間に起こった面倒な事といったらキリカとワトソンがなぜかいがみ合っていたのと、俺が女性と一緒に話してたらいたら背筋が凍るような感じがしたのしかないぞ」

「その原因すべてがクロウ、君なんだよ。」

……キリカもワトソンも大変だなあ」

男はそうつぶやいた

青年にはきこえていなかったようだ

「さあ、無駄話はやめようぜ」

「そうだね、もう時間だね」

「じゃあな、元気でやれよ」

「うん。」

クロウ、君が何を隠しているのかは知らないけど、僕は君が何を隠しているように友達だ。」

男は真剣な顔で青年に言った

「分かったよ。はあ

お前いつから《視てたんだ》？気づかなかったよ」

「「いろんな経験」の所からだよ。まあ、君に気づかれないようにしたからほとんど視えなかったけどね」

「それも使いこなせるようになってきたか。
この様子なら大丈夫だな」

「大丈夫だよ、だから行っておいで。」

男は目を和ませて言った。

青年はそれに

「じゃあな、留守は任せるぞ。
元気でな、友よ」

青年は手をあげてそう言う
その時彼の後ろから光が男の目に差し込む

男は目を閉じながら

「行ってらっしゃい、また会おう友よ」

と言って目を開ける

目に入っただのはまだ出たばかりの太陽と海だけだった

男はふと笑い青年がいた場所を一瞥して太陽を見つめる

「日の出とともに行くなんてさすが団長ってやつだね」

そんな事を言いながら男は自らの場所に戻っていく……

「あつ、クロウのやつキリカに挨拶なしでいいのかな」

男は友人の事が急に心配になった

s i d e K u r o u

うん？ 今何か命に関わるミスをしたような……気のせいだよな

「ここが武偵高かあ、デカいなあ。そういや2度目の高校なんて人生おかしなものだな」

クロウはいま東京武偵高前にいる
移動手段はもちろん例のあれだ

「さて、今は特にする事もなし。そこらへんでも歩くか」

俺は暇なので町を歩く事にした

俺は今回とある情報により日本にきた。まあ理由は後々話すとしよう。しかしまあ、久しぶりの日本だ。前はお墓参りですぐに帰ってしまったからな。

「日本は他に比べると平和だなあ。」

「そうだね、日本は平和なのですよお」

ああ、本当にそうだ：：あれ？　俺は1人で歩いていたはず。　な

らさつき返事を返してきたのは？

俺は横に振り向いた。

そこには、金髪をツインテールにした美少女がいた

「久しぶり、クーくん」

「ま：さか、：：：誰？」

俺がこう答えると、その少女はまるで親に捨てられた子供みたいな顔になり

「ねえ、それ冗談だよね？　嘘だよねえ、ねえ？」

さすがに俺も可哀想になり

「嘘だよ、嘘。覚えてるに決まってるじゃないか」

そう言った。

すると少女は顔を笑顔に変えて「そうだよね、忘れるわけないもんね」と呟いている

「久しぶりだな、理子。何時ぶりかな？」

「うーん、分からない。多分1、2年ぶりかなあ」

理子は首を傾げながら言った。

クロウも正直覚えてないらしく腕を組んで考えている

数十秒経ち、ついに結論が出たようだ

「まあ、どうでもいいか（よね）」

2人はほぼ同時にそう呟いて、そして笑った

「同じような事を言うなんてな」

「思考が一緒だね。クロくんと一緒だなんて／／／／／」

理子は何か小さく呟いて顔が真っ赤になった。??? どうしたんだろう？

「そーいやあ、理子は何をしてるんだ、こんなところで？」

「あつれえ、言ってなかったかなあ？」

私は、東京武偵高に入るんだよ」

「お前もか。実は俺もなんだ。」

そう、俺が日本に来た理由の1つに東京武偵高に入るってのがある。

入る理由は、これからのためを考えてだ。詳しくは今は話せないんだ。

「じゃあ、学校一緒だね」

「そういう事になるな。」

さて、そろそろ宿に戻るかな」

どうせ理子とはすぐに会えるだろうし。俺がそう考えていると理子がなにやら呟き始めた「いましか……やっぱり……いやでも」うん、早くこの場から立ち去らないと厄介な事になりそうだ。こういう時は戦略的撤退だ。けして逃げるわけじゃないからなっ！

俺は足早に宿に向かって「クーくん、ちょっといい？」……敵に回り込まれてしまったようだ

「なっなになあ、理子？」

「いま、クーくんはどこに泊まってるのかな？もしよかったら……」

「よかったら……？」

俺はどうか面倒な事にならないようにと願いながら尋ねた

「クーくんの宿で寝る。」

「はい、ダウト。それはいけないからっ！」

「理子は寝る場所がないんだよ。こんな可愛い女の子に外で寝ろっていうの？」

自分で言うか、と思うが事実だから仕方ない
うーん、確かに女の子を外で寝させるのは俺のポリシーに反する
仕方ない

「分かったよ。勝手にしろよ。」

「わーい、やった」

はあ、面倒な事がこれ以上起こらないといいな。

俺は切に思いながら厄介者と一緒に帰路につく……

side out

日本に久しぶりに来た青年が会ったのは知り合いの女の子。この子とはどのような関係が？（笑）

間章 完結編 いざ日本へ（後書き）

クロウ「今日は俺も参加します。よろしく」

さて、クロウくんですが今はクールっぽいんですが原作介入から素を出すのでよろしくね」

クロウ「やっと気が抜ける」

よかったね、しかし君には女難の相が出てますね

クロウ「まじかよ、そんな事言わないでくれ」

まあ、実際は作者次第と言うことだ

終了――

今回からはこうゆうのをいれていきたいです。

理子が出てきました。作者の都合上性格が少し変わりますがご勘弁を

ではさようなら

また次話で

繋ぐ物語〜というより前の続き?〜(前書き)

今回はかなりぐだぐだです。

前の話の続きみたいなものです

繋ぐ物語〜というより前の続き？〜

side Kuro u

最近よく夢をみるんだ。しかも同じ内容の夢を。

内容は剣を持って立っている俺。そして周りには俺の友人や知り合いが倒れていて、そして……この先は語りたくないからまたの機会だ。

さてさて、今日は武偵高の入学式だ。

いつもより少し早く起きた俺は支度を始めた。

2回目の学校なわけだがやっぱり緊張するな。

やけに真新しい制服、腕時計、新しい環境、友達 e t c …

俺はご機嫌に鼻歌を歌いながら準備を済ませた

「準備完了つと。まだ時間に余裕があるな。」

まだ時間があるので俺は銃の整備を始めた。俺の相棒はグロック18C、全長186mm、重量703g、装弾数17発、発射速度1200発／分。連射もできる優れものだ。

「しっかり手入れしないとな。」

俺は手入れをしながら最近の事を思い出す。

理子はある日の次の日にはどこかに帰って行った。

理子とはある日何もなかったからなっ！。これだけは念のために言っておく

しかしあの日の理子は様子がやけにおかしかったな。
時々顔が真っ赤になったり、挙動不審だったり熱でもあったのかな？

まあ、こんな事を考えているうちに手入れも終了し退屈になった。

「なにかいい暇つぶしはないかな。」

俺はふと思いついた。ソロモン72柱を全部把握しないといけないな。

ソロモン72柱……遙か昔、ソロモンが使役したと言われる72体の悪魔たち。強さや能力、知識などバラバラだが一つ共通点があるとすれば、どいつもチートって事だ。例えばだ、俺が移動で使ったあの悪魔、ガープの能力は好きな場所に連れて行ってくれる。他にもチートなやつがいろいろいる。

まあ、その分面倒な事をしなければならんだが。

72柱はやはり悪魔らしく代償を求めたり、誘惑してきたり、めったにないが命を狙ってくるやつなんてのもいる。

だからあまり使いたくないんだ。

もちろん友好的なやつもいるし、認めてくれるやつもいる。しかし苦勞が絶えない。先祖の偉大さがよく分かるよ。

クロウは一冊の本を取り出した。それには異国の文字が書かれている。かなりの年代物らしく表紙の文字はかすれていて見えない。

「こいつは召喚したらヤバいな。世界が壊れかねん。」

クロウは危ない発言を呟きながらあるページをみる。そこにはよく分からない言語がびっしりと書かれている。読み終わったのかクロウは本を閉じてしまった。

「さて少し早いが行くとするか」

クロウは荷物を持ち外に出る。

「どうか事件なく過ごせますように」

s i d e o u t

彼はそう願った。しかし彼の願いは碎かれる事になるのだが。

彼はどんな物語を披露してくれるのだろうか。

いまここに彼が演じる舞台が始まる。もちろん台本などない。さあ、彼は喜劇を作るのか、それとも悲劇か。

繋ぐ物語〜というより前の続き?〜（後書き）

結城「どうでしたか。」

キリカ「今回は作者の才能不足ですごくぐだぐだだったでしょ」

すいません今回は原作介入をさせるために無理やりまとめたのでぐだぐだです。

あとがきで失敗したくないので

結城「それじゃあ皆さん」

キリカ「また次回で会おうね」

本編 第1羽 鴉は出会う（前書き）

こんばんわです。

今回から原作に介入しちゃいます。

あ、あと信じがたい事なんですがついにPV1000000越しました。

こんな駄文を読んでくださって本当にありがとうございます。
ではごらんください。

本編 第1羽 鴉は出会う

——空から女の子が降ってくると思うか？

昨日キンジと見た映画では、降ってきたんだ。

まあ、アニメやラノベならよくあるパターンだが。

だがな、安易に『空から女の子が降ってきてほしい。』なんて思っちゃいけない。よく考えてみる。そんな子は複雑な事情を持った子だ。その事情に巻き込まれ厄介な事になる。現実のそれは非常に面倒に決まってる。

それに救う相手はこれ以上増えてほしくないし。

だから俺、御剣クロウは——

空から女の子なんて、降ってこなくていい。

俺は今、非常に忙しいんからな。だから厄介事はごめんだ。

だがな、もし、もしだぞ。降ってきたとしたら正義の味方を目指してる俺はその子を助けるな。——

ピン、ポーン

俺はドアチャイムの音で目を覚ました

「誰だよ、こんな朝っぱらから……」

まあ、わかってはいるんだけどな。

クロウは体を起こしてキンジを叩き起こす。

「おい、キンジ、起きろ。朝ですよ。」

「うーん、もう朝かあ」

キンジは目を擦りながら体を起こし時計を見る。

「あれ？クロウ、今日は起きるのが早いな」

「この慎ましいチャイムが原因さ」

クロウは顔をしかめながら言った。

いかに慎ましいとしてもチャイムはチャイム。睡眠妨害には充分だ。

「さあ、キンジ、早く止めておいで。俺はもう一度寝る。」

「止めてはくるけど多分クロウにも用はあると思うよ。」

キンジはお前も被害を受けろバカめ、というような顔でこちらを見てきて少しうざかった。しかし用とはまさか

「ま、まさかキンジ、もうバラしたのか!？」

「いや、まだだけど。まだ隠しておきたいんだろ？」

「正直な。なかなか言い出せないものだぜ」

「確かに。でもいつかは言わなきゃならないんだぞ、■ ■」

キンジの言うとおりに、このまま言わずに過ごすのはいけない。逃げることはやめないと。

しかしキンジは鋭すぎるな。『俺』だって事を見抜かれるなんて思いもしなかったよ。

「まあ、早く出ようぜ。俺に用ってなんかあったかなあ。」

少ししてキンジが誰かを連れて部屋に戻ってきた。

「一応顔を出しとくか」

俺はベットから飛び降り（クロウが寝てるのは二段ベットの上）キンジ達の元に向かう。

「おはよう、白雪」

「お、おはよう、御剣くん」

相変わらずの反応だな。何故だかしらないけど俺が話しかけるとこの通り緊張してしまうんだ。

はぁ、どうやら俺は白雪に嫌われているようだな。だから本当の事を言いづらいんだ。

「まあ、ゆっくりしていきなよ。キンジ、学校に行く時間になったら起こしてくれ」

「ああ、分かった」

俺は多分、邪魔者なのでもう少し寝るとしよう。

「おーい、クロウ起きろー」

どうやら時間のようだ。さっさと制服に着替える

「銃は…あるな。よし、行くとするか」

俺はキンジと一緒に家をでる。

どうやらバスは行ってしまったようだ。

「これはチャリで行くしかないな。

じゃんけん、ぽん…：よっしゃー」

俺がじゃんけんに勝ったのでキンジが漕いで、俺は後ろに乗る。

「さあ、Let's go」

この日、俺とキンジはバスに乗れなかった事を生涯後悔するはめになった。

バスに乗り遅れた俺たちは急いでいた。まあ、俺は後ろなんで楽だし何もする事がない（キンジのチャリには荷台がないのでクロウはキンジの肩に手を乗せて足を掛けて乗っているから普通はかなりきついはず）ので通学路の景色でも見るとするかな

ここ、東京武偵高校はレインボーブリッジの南に浮かぶ南北約2キロ、東西500メートルくらいの長方形をした人工浮島メガフロートの上にあるんだ。存在を知った時の俺は驚くばかりだったな。

もうかなり進んだだろうか。学校までの距離が半分くらいになった頃、そいつはいきなり現れた。

「そのチャリには爆弾が仕掛けてあります」

はい？なんですと。

「クロウ、どうにか出来ないか」

どうにかねえ。確かに方法はあるが人通りでやるのは危ない。なんかないかねえ。あっそういや

「キンジ、よく聞いてくれ」

「なんだ解決法を見つけたのか」

「昨日、お前の高級そうなプリンを食べちゃった。」

いやぁ本当においしかったな、あれ。俺は頑張ったんだ。だがやつの誘惑には勝てなかったのさ。

「やっぱりお前かつ！」

あれ、結構楽しみにしてたんだぞ。……っていまはどうでもいいわっ！」

「すまんすまん。」

一応無いわけではないけど、ここじゃあきついな」

「そうか、確かにこの状況はきついな」

自転車には嘘かホントか知らないが爆弾、後ろからはセグウェイが銃口をこっちに向けながら追いかけてきやがる。
なら連絡するしかないか。

俺は携帯を取りだそうとすると

「飛び降りたり 減速させても 爆発 しやがります。連絡 しよ
うとしても 爆発 しやがります」

なんてうつとしい。こうなったら最後の手段しか……

side ????

そうクロウが思っている頃、近くのビルの屋上に1人の少女がいた。

「見つけた。あれね。」

少女は何を思っていたいきなりビルから飛び降りた。

「待ってなさい。今助けるから！」

そう言い残して…

side クロウ

「キンジ、どこにいくつもりだ？」

「とりあえず人がいない第2グラウンドに行く」

確かに人を巻き込んでしまうといけないからな。
人がいない場所なら俺も手が打てるしな。

「やっぱり誰もいないな」

キンジはそう呟いた。なら俺も準備をするかな。

クロウはまたどこから出てきたか知らないが瓶を手を持ちそれを飲む。瓶には、アルコールが含まれている事が分かる表示があった。

「キンジ、こっちを一回向いてくれ。」

「なんだ？ ほれ、向いたぞ」

キンジは一瞬だけ顔をこちらに向けた。たったそれだけの事だがクロウにとっては重要な意味をもつ
よし、きたな。この体中が熱くなる感じ。なっていく、ヒステリアモードに。

ちょうどその時だ。グラウンドの近くの七階建てのマンション、確か女子寮の屋上からピンク色の髪をツインテールにした少女が飛び降りた。

俺は一瞬焦ったが、すぐに気づいた。あれは助けにきたのだと。

「ほらそこのバカ達！ さっさと頭を下げなさいよ」

俺はすぐにキンジの頭を手で下に抑えながら頭を下げた。

バリバリバリバリッ

そんな音ともに俺たちと追いかけてっこをしていたセグウェイは壊れた。

「あの娘、なかなか出来るな。」

俺は自然とそう呟いていた。しかしこれだと俺がヒスる必要なかったよな。

さて、後ろのやつも壊れた。キンジはあの娘がなんとかしてくれるはず。

なら、俺は脱出するのでしょうか。

「キンジ、私はここで脱出させてもらう。」

「へっ？ おいていく気か。それになんだ、その喋り方？」

「お前はあの娘が助けてくれるだろう。あとこの話し方はまだ当たりな方だ。」

おい、そのの娘。こいつを助けてくれると助かる。私は自身の力で脱出する」

俺は自転車を飛び降り、着地。そして全力で逃げる。

少し後に大きな爆発音が響き渡った。

「向こうはどうなったのだろうか」

俺が様子を見に行くと、7台のセグウェイがいた。そしてセグウェイに付いていたサブマシンガン、ウージーが倉庫に向けて銃弾を放っている。

そこにキンジが出てきた。

「お、おい、危ないぞ。」

俺の声が聞こえたのか、キンジはこちらを向いて、ウインクをしてきた。どうやらあいつもヒステリアモードになったらしい。

キンジはウージーの放った7発の銃弾をよけ、そしてたった7発の弾を放つ。それは見事、7台の銃口に入り、セグウェイは破壊された。

キンジはウージーが撃った壁を見つめ「いい狙いだ。」と呟きそして倉庫に入ってしまった。

「あいつ、チートじゃね?」

ヒステリアモードなのについて地で突っ込みをしてしまった。

そして数分たった頃だろうか、あいつらは出てきた。

なんだか知らないけど争っているようだ。まあ、理由は想像がつく。キンジがヒスるってことはそういう事だ。俺はその様子を笑いながら見る。

しかし、あの娘、かなりの手練れだな。ヒステリアモードのキンジ相手にあそこまでやるとは。

俺は感心しながら事の次第を見ていたのだが、全く、しつこい奴らだ。

また4台のセグウェイがやってきた。まだキンジ達は気づいていない。かなり危ないな。

「助けるとするか。」

俺は弓を投影し、一本のねじれた剣を投影する。俺はある言葉を呟く。するとねじれた剣は矢になった。それを弓につがえ放つ。

「偽・螺旋剣」
カラドボルグ

その矢は1台に刺さる。そして俺はその矢にこめられていた魔力を

「壊れた幻想」
ブローケン・ファンタズム

解放した。

s i d e o u t

クロウが解放した魔力は残りの3台を含め、何も残さず吹き飛ばした。

「目的は達成したな」

ただクロウは忘れていた。キンジとアリアが近くにいてそれを見ていた事に……

side クロウ

「キンジ、早く行こうぜ。」

セグウェイを吹き飛ばした俺は、キンジに話しかける。
キンジは少し遅れて反応した。

「ああ、分かった。それじゃあね、アリア。」

「ま、待ちなさい、この強姦魔。」

アリアはこちらに走って……あ、転けた。なるほど、キンジが弾をばらまいたのか。

「それじゃあ、さいなら」

俺とキンジは校舎に向かって歩き始めた。
後ろからアニメ声で

「絶対、風穴あけてやるんだからあああ」

と聞こえてきたがスルー。

はあ、今日は不幸な日だったなあ。
俺はこの時の発言を取り消したい。

まだ不幸はこれからだということをあの頃の俺はまだ知らなかった
……。

テープ1

クロウが再度睡眠した時のキンジと白雪の会話記録

カチャ、

「白雪、本当はクロウに用があったんじゃないのか？」

「うん、どうしても聞きたいことがあって。」

「何を聞くんのだ？」

「もしかしたら御剣くんはあの人かもしれない」

「あの人って？」

「死んだとニュースでいわれたあの人、■■■■かも知れない。」

「もしクロウが■■■■だとしたらどうするんだ？」

「今までの事を聞いて……長年の想いを彼に伝える……」

「今までの事を聞いて、なんて言った？」

「ううん、なんでもないよ」

「そうか、あ、もうこんな時間だ。白雪、先に行けよ。俺はクロウを起こして行く。」

「分かった。キンちゃんも遅刻しないようにね。それじゃあね」

ツー、ツー

本編 第1羽 鴉は出会う（後書き）

キリカ「今回の作品は、どうだった」

少し口調がおかしかったりすると思いますがどうか許してください。

結城「作者は片手に原作、目はアニメを見ながら頑張っているんですよ」

キリカ「だから作者を暖かい目で見守ってあげてね」

結城「それじゃあ、また次回に会いましょう。」

キリカ「感想、意見を待ってます。」

結城「なんでもいいので送ってあげてください。じゃないと作者が泣いてしまうので」

本当に感想お願いします。

ではまた次回にお会いしましょう。

アディオース

第2羽 今日から厄日!?(前書き)

最近、クロウの能力が増えてきているのに、大した説明も入れずにいた事に気づいた今日この頃……OrZ

第2羽 今日から厄日!?

side キンジ

(…:…またやっちゃったよ…:…)

結局出られなかった始業式の後、俺は鬱々とした気分で、クロウと一緒に教務科に事件の報告を済ませ、新しいクラスにトボトボ向かっていた。クロウもクラスは一緒だったようだし。

なぜ鬱々とした気分かだって？

それはさっきの事件の時になっちゃったからだ、ヒステリアモードに…:…。

ヒステリアモードと俺は呼んでるが名称は『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』約してHSSという。

このモードになると通常の約30倍能力が上がる、まあ所謂チートなんだか、やはり現実というのは厳しいものでヒステリアモードになるには条件が必要なんだ。

その条件っていうのは人によって様々だが変な物が多い。

例えば俺の祖先はもろ肌を人に見せてヒスっていたようだし、クロウの場合は人前で度の高い酒を飲む事でヒスるなどおかしな条件が多い。

そして俺の場合、性的な興奮でヒステリアモードになるんだ。

これだけなら、まあいい（いや、駄目な気もするが……）んだ。しかし、ヒステリアモードになるともう1つ嫌な点がある。

ヒステリアモードというのは、男が女を守る時に大なり小なりパワーアップする本能が、異常に発達したものらしい。

俺はその本能のせいか、ヒステリアモードになると、女の子に対する言動が変わってしまうんだ。

例えば、困っている・ピンチな女子を何がなんでも守りたくなってしまうこと。

女子に対してキザな言動を取ってしまうことだ。
しかも記憶だけはあるからたちがわるい。

「はあ、こんな力今すぐにでも捨てたい」

「まあ、そういうなって。」

「クロウはいいじゃないか。ヒスるのも楽だし、女子に対してもなら変わらないし」

クロウは苦笑いしながら

「そんなに恥じる事じゃないだろ。それに俺だってハズレを引いたらもっと最悪な奴になるからな」

ハズレ？ ハズレなんてあったか、まあ人それぞれだからなと俺は思

った。

もうすぐで2年A組、俺らのクラスにつく。

厄介な物を残しやがって。

遠山家は代々この力を遺伝させてきた。

この『兄さんを破滅させた、呪うべき、忌まわしき力を』

「キンジ、その力を恨んだらいけないよ。君の力は近い未来、必要になるんだから……」

この時の俺は考え事をしていてクロウの意味深な発言に気づけなかった……

s i d e o u t

「先生、あたしアイツの隣に座りたい。」

そう言ったのは、ピンクのツインテール、神崎・H・アリアだ。指した先はキンジ、指されたキンジはイスから転げ落ちる。

そしてクラスの一員はキンジの方をみて――歓声を上げた。もちろん俺も大爆笑だ。

「よ……良かったな、キンジ！なんか知らんがお前にも春がきた

みたいだぞ！先生、オレ転入生さんと席代わりますよ。」

キンジの手を握ってブンブン振りながら、右隣に座っていた武藤剛気が席を立つ。

「あらあら。じゃあ武藤くん、席を変わってあげて。」

先生は何だか嬉しそうにキンジとアリアを見てから提案を許可する。教室は拍手喝采だ。もちろん俺も悪乗りする。

耐えかねたキンジが何か言おうとした時、アリアが、

「キンジ、これ。さっきのベルト」

と言いつつベルトをキンジに投げた。ははっ詰んじまったな、キンジ。

「理子分かった！分かっちゃった！」

とか言いながら、峰理子がキンジの左隣の席から立ち上がった。相変わらず理子の服装は凄いな。

クロウがそう思うのも無理はない。理子の服装は制服をヒラヒラなフリルだらけに改造している。

髪型はツーサイドアップテールだったけな。一度あれをツインテールと言ってしまう、理子にその方面の話を半日、聞かされて死にそうになったのはいい思い出だ。

俺がこんな事を考えながら理子の方を見てると、

ずぎゅぎゅん！

銃声が鳴り響いた

「れ、恋愛だなんて……くっだらない」

アリアは二丁の拳銃を両手にもちながらそう言った。

どうやら、アリアが撃ったようだ。クラスが急に静かになった。

バカ騒ぎしていた理子の後ろの席に座っていた俺は、静かになったいま、今日のプランについて考える事にした。

まず、帰って冷蔵庫に入っているキンジのプリンを食べて、風呂上がりに、昨日買った焼きプリンを食べて、寝る前に今日買う予定のミルクプリンを食べて……

俺はニヤニヤしながら、今日のプランを考えていた。すると

「何笑ってんのよ。……あつ、あんたは」

「いやあ、今日のプリン……プランを考えていたのさ。」

俺は、まったく関係ないオーラを出しながら返答した。しかし神は俺が嫌いらしく、

「あんたはあの弓使いっ！」

ああ、目を付けられちゃった。しかもクラスの奴らはあれを知らない

いつてのに。　早めに口を封じとかないと。

「その話はここではしたくないんでね。あとにしてくれよ。」

アリアも何か察したらしく

「分かった。でも後で絶対に聞くからね。」

はあ、これは厄介な事になった。

そしてまた理子が何か言い始め、また撃たれた。

「全員覚えておきなさい。そういうバカなことを言うヤツは……」

これが、アリアがみんなに発した最初のセリフだった。

「――風穴あけるわよ！」

はあ、今日は厄日なのかなあ、占い見てないから分からないが多分、最下位だろうな。まあとりあえず、この後はキンジを連れて逃げないと大変な目にあっちまうからな。

さあて、逃走ルートはと……

この時の俺は、ただ面倒だなと思っていた。

この出会いが俺の人生をまた一步、非日常に連れていくなんてつゆ知らず……

昼休みになると同時に、俺はキンジを連れて理科棟の屋上へと避難した。

「はあ、キンジのせいで俺まで目を付けられちゃったじゃん」

「いや、あれはクロウ自身のせいだろう！　つか、あの弓矢はどういう力なんだ！」

「あれは俺の切り札の1つだから教えられないね。」

「まあ、子供の時にみたあれみたいなものか」

「ちっ、よく覚えてんな。そうだよ、キンジ。まあ、この事は秘密で。じゃないと今でさえやばいSSRにとばされる」

俺は今までの勧誘を思い出し、ため息をついた。

「クロウがあれをみせたのが原因だと思うよ」

「やっぱりかあ。見せたのは失敗だったな」

キンジは苦笑いしながら頷く。

「まあ、俺は戻るとしますかね。誤解をとかないと……。それじゃあ後でな、キンジ」

「ああ、俺もあと少ししたら戻る。」

俺は屋上から飛び降りる。そして風に頭の中で語りかける。

「よし、今日も快調だな」

クロウは宙に浮かびながら微笑む。そしてすぐに顔を元に戻し

「はぁ誤解解くのだるゝ。」

ため息をついて彼は戦場になるであろう教室に戻っていった。

第2羽 今日から厄日!?(後書き)

次回くらいで一度、キャラ設定を書きたいと思います。それまで分りにくい所もありますがご勘弁を……。

では、サヨナラです。

第3羽 奴隷? そんな制度あったかな? (前書き)

おそくなってすみませんでした。

テスト週間なので忙しかったです。

一応、クロウのキャラ設定だけ入れとききました。

第3羽 奴隷？そんな制度あったかな？

「はあ、今日は本当に厄日だ。」

俺は校舎を出て、今日1日を振り返ってみる。

まず、神崎に目を付けられる。次に、質問ぜめにあう。そして、最後に聞いた話なんだが神崎に俺の事を探られているらしい。

よく考えると全部、神崎のせいじゃないか。という事は神崎にこれからエンカウントせずに過ごせば、面倒が減るな。

そうこう考えながら帰っていると、プリンを買いに行っていない事に気づいた。

「あゝあ、今日の予定が崩れた。」

俺はほんとに仕方なくプリンを諦め、寮に戻ることにした。

クロウが寮に戻ると部屋のドアの前に例の人物がいた。チャイムを

連打している様子。

「はぁ、何やってんだあいつ？」

クロウは隠れた場所からその様子を見る

知らない人から見ると、部屋に入ろうとしている少女を覗き見している危ないやつにしか見えない。それでいいのか主人公とツツコミたくなるが、まあスルーしてくれると助かる。

「しかし、あのトランクはなんだ？まさか泊まる気じゃないよな？」

クロウはそう推理して身震いした。

もしそうだとしたら。さっきの推理が正しいとすると、また厄介な事が舞い込んでくるんじゃないのか？

なら、見つかる前にあいつの部屋に逃げ込むのが上策！

そう考えたクロウは、すぐにここから立ち去ろうとして

「あ、見つけたわ、クロウ！」

……見つけられました。

「ちっ、見つかったしまった。だがここから俺は逃げ「カチャッ」ませんよ。チクショッ」

銃口を突きつけられたクロウはその場で逃げることを諦めた。

「……で、何のようだ、神崎・H・アリア？」

俺は目の前にいる少女に向かってそう言葉を放った

「へえ、そんな事よく言えたわね。朝の事を忘れたとは言わせないわよ。」

「ああ、あれを聞きにきたのか。暇なやつだなあ」

「まあ、それもあるけど、そんな理由だけでここに来るほどあたしも暇じゃないわよ」

「なら何の用が？」

いま、俺の第六感がつげている。厄介な事に巻き込まれるから逃げる、と。

だが、銃口を突きつけられている今の状態では、逃げる事ができないのだよ。

「これは、遠山キンジの方にも話す内容だから、いったんあんた達の部屋に入るわよ。」

推理通りの展開にさせてたまるかよ。

「へ、部屋の外じゃいけないのか？」

「それだと、あんたは多分：いや、絶対逃げるわ」

「な、なんでそう思うんだ？」

「それは……勘よ。」

こいつの勘、どんだけ鋭いんだよ。

しかし、神崎の部屋に入る理由は間違えではないし、強引に部屋に入り込まれるよりはましだ。

「はあ……分かったよ。」

「決まりね。それじゃあ早く入りましょ。」

「あゝあ、今日はほんと仕組まれてんじゃないのかと思うほどに厄日だ。」

「なんか言った？」

「いやゝ、君といると不幸しか起きないんだよ。だから早く帰って
「風穴あけるわよ」くれなくともいいよ」

神崎、ガチで銃をこちらに向けるのはどうかと思うぞ。まあこの距離なら強化魔術つかえばなんとか避けれるけど。

その後、俺たちは部屋に入ってしまった。

この部屋は普通4人で使うものなんだが、なにやら事情により俺とキンジだけが使っている状態だ。そんなわけで、中にはキンジしかいなかった。

「おかえりー、クロウ……と神崎」

「ただいま、キンジ。神崎は何か知らんが俺たちに話があるらしい」

「そういうわけよ。てか、キンジ、なんでチャイムに気づかないわけ？」

「えっと、面倒くさ……少し寝てたんだよ」

アリアは納得したのか何も言わなかった。だけどキンジ、いま本音がでかかってたぞ。

「でっ神崎は、俺たちに何の用があるんだ。」

「アリアでいいわよ。ねえ、トイレどこ？」

アリアは俺の話を半分スルーして、周りを見渡す。そして、トイレを見つけ、入っていった。

「なあ、クロウ。何で神：アリアと一緒にいたんだ？」

俺はキンジに今までの事情を話した。拳銃を突きつけられたり、拳銃を突きつけられたり……
話し終わるとキンジは優しい目でこちらを見て

「大丈夫、きっとお前にも幸せはくる」

「キンジ、少しウザい。そして、お前もあと少しで仲間入りするさ」

なんたって、あいつはすぐに拳銃を抜くからな。

そんな話を2人でしていると、アリアが戻ってきた。

「さあ、俺たちに何の用があるんだ？」

「ああ、まだ言ってなかったわね。まあいいわ」

まあ、よくはないがツツコミを入れると話しが進まないしな。

「キンジ、クロウ。あんた達、あたしのドレイになりなさい！」

……………はい？

「アリア、もう一度言ってくれ。よく聞き取れなかった」

落ち着け、今のは聞き間違いだ。

よく考えてみろ、いきなりそんな事言うはずない。

「もう一度言うわよ。あんた達、あたしのドレイになりなさい!」

ほらみろ、さすがにドレイなん：て：：：嘘やろっ!つか、何で奴隷!?

「いきなり、何てことを言うんだ、こいつ。ありえん。」

キンジもどうやら啞然としているようだな。さてさて、厄介な事になってきた。日本に奴隷の制度はありませんよ。

俺はその時、そんな事を考えていた。

そう、俺は、自分は巻き込まれないと思っていた。巻き込まれても、まあ大丈夫だと思っていた。

はあく、この時の俺を止められたらな、俺の未来はもっと楽だっただろう。

出逢ったのは1人の厄介な少女。少女の発言から物語は進む

2人の青年は巻き込まれていく
非日常的な世界へ：：：：

キャラ設定

名前：御剣・I・クロウ

年齢：16歳（精神年齢は前の人生十今で30を越す）

容姿：少し短い黒髪に整った顔。身長は170Cm、身体はすらりとしている。イメキャラは、テイルズのガイ。

能力

投影、固有結界：術者の心象風景によって世界そのものを塗り潰す「固有結界」、自分の心象世界を侵食させることで、一定範囲内を、現実世界とは異なる法則の支配する異界に変える魔術または能力。投影は、自分がイメージしたものを魔力に作り出す。クロウの場合、剣や弓が多い。

精霊魔術：ソロモンが使っていたとされる精霊を使う魔法。クロウは未熟なため風以外使えない。

召喚魔術：ソロモン72柱という悪魔を使役したり、能力を借りた

りする魔術。

剣術……???

あとはまた今度で（笑）

趣味：ギター、釣りなど

好きなもの：プリン、鳥、助けた人の感謝の言葉

嫌いなもの：貝類、人を傷つける奴

我らが主人公、最近、チート的な能力がついてきている。

普段は怒る事などしないが、ある事を馬鹿にされると、暴走する。

プリンが大好きで、日々プリンを使った料理を考えている。

あとはお楽しみに

第3羽 奴隷？そんな制度あったかな？（後書き）

ふう、明日もテストかあ（泣）

というより早く、キャラ設定をきちんと作らなければ

皆さんにお尋ねしたいんですがアリアはヒロインにいられた方がいいですかね？

まあ良ければ意見ください

では、また次回会いましょう

第4羽 現実思った以上にうまくいかない（前書き）

遅くなりました

テストとというものに追われていました。だけどついに終了しましたへ▽、ッ

では、どうぞ

第4羽 現実思った以上にうまくいかない

前回のあらすじだぜ

俺が寮に帰ると、部屋の前扉の前に神崎・H・アリアがいた。どうやら俺とキンジに話があるらしい。なにやら、面倒だと思った俺はその場をうまく去ろう（逃げよう）と思ったんだがどうやら見通されてたらしく、チャカを向けられ断念。

不覚にも逃げられなかった俺は、部屋に入り込まれ、こう言われたんだ

『あんた達、ドレイになりなさい！』

さあ、皆さんならどうする。

俺はどうするかって？ 考えてるなら君たちに問いかけないよ。

まあ、そろそろ始めるぜ

第4羽 現実思った以上にうまくいかない

「話が全然見えないんだが……」

俺はとりあえず、アリアに何が言いたいのか聞いてみた。

キンジもそれが聞きたかったようで、真面目な顔つきで、アリアをみる。

「分かんないの？」

「ああ、分かんねえな。」アリアは意外っ！という顔を一瞬したあと、

「もうわかってるとおもったんだけど。まあ、そのうち分かるでしょう。」

と先送りにされた。

ふむ、俺はアリアの情報をあんまし持っていないからな。

確かSランク武偵で今まで逃がした犯人数は0。二つ名は、“双銃^{ドラ}のアリア”だったけな。

そんなアリアが俺たちを奴隷にかあ。

この場合の奴隷とは、‘仲間もしくは相棒’ということだろう。今まで、一番を走っていたことと、そして今日の教室での態度からして友達が少ない、もしくははいないのではないのだろうか？ だから俺らに奴隷という遠回しの言葉を選んでしまったのではないか？

キンジとアリアが言い合いを始めていく中、俺は推理を進めていく。今まで1人だったアリアが、何故俺たちを奴隷にしたがる？ まあ、キンジも俺も確かにそこよりは役にたつと見たのは分かる。キンジはヒステリア、俺は投影を使ったしな。

だが強いだけなら俺たちはいらんんじゃないか？アリア1人でも充分強い。わざわざ戦力を増やす必要はないからな。なら何で俺たちを……？

もっと情報が欲しいな。今日の夜にでも調べてくれるよう連絡でも入れるとするか……

推理を一旦中断し、俺はあいつらの会話に加わる。少しでも情報を得るために……

side キンジ

「はあ、面倒な事になってきたな。」

俺は、ももまんを頼張るアリアをみてため息をついた。

あれから、クロウも会話に加わり、本題に入ろうとしたところで、アリアが飯を食べたいとか言い出して下のコンビニに飯を買いにいったんだ。

俺は普通に弁当を買ったんだが、あとの2人の買い物はすごかった。

アリアは、松本屋のももまんを買い占めた。クロウはその店に置いてあるプリンを全種類買って、飲み物もプリンなんたら、お菓子もプリンなんたらと、プリン系を制覇した。

店員のあの表情。一緒にいた俺は恥ずかしさで顔をあげられなかったよ。そのあと部屋に戻るまで、もうこいつらとは、店にいかないと考えていたよ。

まあ、そんなこんなでさっきの俺の発言につながるんだが。

しかしなんだって俺とクロウが奴隷にならないといけないんだ？

アリアの話が全く掴めないのは俺だけか？、と思ったんだが、クロウもどうやら分からない様子なので、俺が理解力がないってわけじゃないよな。

そういう結論に至り、俺はアリアに質問する事にした。

「なあ、ドレイってなんなんだよ。どういう意味だ」

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」
アサルト

「何言ってるんだ。俺は強襲科が嫌で武偵高で一番まともな探偵科に転科したんだ。」

それに、俺は武偵自体、やめるつもりなんだよ。だから、よりによってあんなトチ狂った所に戻るなんてムリだ。」

そう、俺は武偵なんてバカなことはやめる、戦って、戦って、人を助け、自らを犠牲にしたのに、非難された兄のような損な役回りな
んか……

side out

俺は、黙ってアリアとキンジの話をきいていた。

どうやら、アリアは、俺たちにパーティーに入ってほしいらしい。

しかし、キンジは断るだろう、と考えていると、思った通り断った。

キンジは、兄を失ってから、武偵をやめようとしているらしい。俺はとやかく言うつもりはないがな。だが、あの人はまだ……まあ、話に集中するとうしよう。

キンジとアリアの話しあいが続く

「あたしにはキラいな言葉が3つあるわ」

「聞けよ人の話を」

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この3つは、人間の持つ無限の可能性を自ら押し留める良くない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。いいわね？」

『私にはね、嫌いな言葉が3つほどあるのだよ。』

重なる、重なる、あの言葉と……

「……悪い、少し外に出てもいいか？ 風にあたりたいんだ」

俺はアリアにそう言った。アリアも何かを察したのか、あっさりと許可してくれた。

「ふう、気持ちいいな。」

外に出て夜風にあたりながら、呟く。
持ってきた、プリンを無理やり液体にしたような物をのみながら、目的もなくただただ歩く。

俺が外に出てきた理由は、アリアの台詞が昔聞いていたものと重なり少し動揺してきたからだ。

『クロウ、キミは本当にダメ人間というものだね。』

『いやいや、普通の人間は、こんな風に泳いで海を渡らないから。』

うーん、いま考えてもあれはヤバかった。まじ、鮫と水中戦はないな。しかも俺だけ戦わせて自分は逃げたし。
あゝあ、悲しくなってきた。まあいいや。

『いやあ、今回は死ぬかと思いましたよ。もう今回みたいな事はやめましょうね。流石に死んでしまう。』

『大丈夫さ。だって私もキミも死んでないじゃないか。』

『そういう問題じゃあないでしょ。今回は死ななかっただけでもしも死んでたら……』

『クロウ、それはキミらしくない見解だ。』

『それは、どういう事ですか？』

『私にはね、嫌いな言葉が3つほどあるのだよ。』

《もしも》 《後悔》 《もう諦める》

この3つはね、自身のした行動に自信がもてない、自身の力をフルに発揮しない奴が言う、甘い言葉なのさ。

だからね、この言葉を私の前で使うと、罰として、私と添い寝しなければならなくなるよ?」

『是非とも守らせていただきます! そんな恥ずかしい事できるかい! ! って顔を赤らめるな、コラ! !』

『こんな冗談は置いといて『冗談なのかよ! ?』この3つはなるべくキミに使ってほしくないな。

なんせ、キミは正義の味方を目指してるんだろ? なら、自身の行動に自信を持たなくてはね。』

『言われなくても分かってますよ。』

『それならいいのだよ。なら、これも守ってくれるかい……』

「:決して、夢を諦めないと、私を超えていくとね、だったか。」

あの時は、ただ頷いていれば良かった。だけど今は違う。

「あなたのあの言葉は、今になって俺に届いていますよ。」

約束を守る難しさを知った。その約束の重みを知った。

ようやく、今になって気づいた。

「全く、俺はいつも気づくのが遅いんだよ。それにあなたを超えるなんて、不可能に近いんですよ。」

でも、あなたなら言うでしょうね。『不可能じゃないなら、出来る』とね。

なら、その弟子である俺もやり遂げて見せましょう、“出藍の誉れ”というものを」

諦めない、それが今は亡き人と交わした約束の1つ。
俺は気づけなかった分、約束を守ってやる！

「ん、そろそろ帰るとしようか」

俺はキンジに電話をかける

「もしもし、キンジだよな」

「ああ、ただいま部屋を追い出されたキンジだよ」

「なんだそりゃ？」

俺はキンジに話を聞かされた。

「……キンジ、ドンマイだな」

「やっぱり、理不尽だよな」

「ああ、理不尽だな。まあ、俺は他の所に泊まるとするか。それじゃあな」

「ちょ、ちょっと待ってく」

ツー、ツー

「さて、奴の部屋に行くか。」

俺は、携帯をしまい、今日の宿に向かって歩き始めた……

こうして、彼の厄日とやらは終わりを迎えていく。だが彼には残念だが、今日が厄日なのではないのだ。

今日“から”厄日なのだ……

2人の青年と1人の少女による問題

1人の青年は、亡き兄を思い、悲しむ。

1人の青年は、亡き人を思い、決意を固めていく

彼らの物語はまだ、プロローグにも満たない

少女の考えと彼らの行動が交わるとき、

彼らはどのような物を魅せてくれるのだろう

そして、彼は無事、約束を守ってくれるのだろうか

まだ、物語は始まったばかり……

おまけ

「そういえば、あれもヤバかったな」

俺はふと、昔を思い出す

『おい、クロウ。今日はあいつが相手だ』

『し、師匠、あれは人間が勝てる相手じゃないです！』

『諦めたらそこで終わりだよ。さあ、L e t ' s t r y』

『いやいや、無理だって！素手は無理だって！ってこっちくんな』

確か、途中まで健闘して俺はこれ以上思い出すことをやめた。

流石に勝てないよね、ライオンには……

第4羽 現実思った以上にうまくいかない（後書き）

すこし、師匠を出してみました。

これからも昔話が出ますがご了承ください

あと、基本的にside outすると、クロウまたは、第三者視点になります。

では、また次回に

第5羽 ご連絡は計画的に？（前書き）

ほんとに最近遅くてすいません

だげどついに夏休み。書きまくってやるぜみたいなテンションでいきたいと思いますのでご了承を。

第5羽 ご連絡は計画的に？

前回のあらすじだよ

どうやら、アリアはクロウ達と武偵活動をするつもりらしく、強襲科に誘う。

しかし、キンジにはある事情があり断る。クロウも、少し考え事があり部屋を去っていく。勝手な人たちだなあ

そして、物語は朝を迎える

では、始まるよ。そして早く出番がきますようにB Y 大谷結城

第5羽 ご連絡は計画的に？

「さてさて、こんなもんか」

俺はノートパソコンを弄る手を休める。画面には、暗号化された

文字列が浮かんでいる。

「順調ってやつだな……ん？、メールが来てる」

一旦画面をメインメニューに戻し、メールを開く。内容は

『調べ物が終了したので、そのデータを送る。』

俺は、添付されたデータをクリックして、中を見る。

「……さすが、自称天才なだけあるぜ、よく調べ上げたな。
これでなんとなくだが繋がってきたな。」

やはり侮れないな、アリア。双剣^{カドラ}双銃の二つ名は知っていたから、
腕前も予想できたが、まさかバリー・トウッド、約してバリツだったかな？まで出来るなんてな。

でも一番驚いたのはその実績さ。
逃がした回数は0ってのは知ってたんだが、まさか99回、しかも全部たった一度の強襲だけでだ。普通の強襲は、警察などに負えない仕事がくるので、武偵はそれをしつこく何度も追って、やっと逮捕するんだが、それを一発とは……俺でもやる気にならないと出来ないぞ。

「あとは……ほお、なるほど。これで“あいつ”の妙な発言の意味が分かった。ようは俺に危なくなった時のお守りをしろと」

全く、人を誰だと思ってやがるんだ。一応、組織のトップなんだぞ。まあ、“あいつ”とはいろいろと縁があるからいいけどな。

「まあ、こんなもんかな。……別に学校の単位ならとうとうと思えばいつでも取れる。だから今日は寝よ。」

俺はしばしの休息とやらをとることにした……

――起きて、起きてくださいよ――

なんだよ、もう少し寝させてくれよ

そう思いながら、重たい瞼を開く。すると、目の前に少年の顔が映った。

「おかえり、少年。俺はまだ眠たいんだが……」

「それは昨日、オレのベットをとったやつがいう台詞ですか！」

俺の前でわめいている少年、名前は……あれ？なんだったかなあ
)

「クロウさん今、『やべっ、こいつの名前忘れた』みたいな事思っ
てませんよね？」

「アハハハ、ソナワケナイジャン」

「怪しすぎます。なら、オレの名前を言ってくださいよ！」

少年はだんだんとクロウに近づいていく。

「えっと、田中だよな、もしかして佐藤？」

「そんな、よくありそうな名字言わないでくださいっ！」

「うーん、なら、上条○麻とか」

「それは、某不幸な高校生の名前ですよ！」

少年にジト目で見られ、焦る俺。なにか手はないものかと考えて、
ふと閃いた。

「実はな、俺は少年の事を少年としか呼べない病にかかっているん

だ」

少年ははあく、とため息をついて、こちらをジト目で見るのをやめる。代わりに、なにかイタいものを見る目でこちらに視線を向けてきた。

「頭、大丈夫ですか？」

「すみませんでした。だから、その目を、その痛々しい視線を向けるのをやめて〜！」

「もう、バカな事をするのはやめようぜ」

「それはこちらの台詞なんですけど〜」

2人のやりとりも終了し、次の話題にうつる。

「さて少年、なぜ俺を起こした？」

クロウはそう少年に聞いた。少年の、『まだ名前わかってないのかよ』みたいな視線を感じつつもスルーして……

「クロウさん、今日学校休んだからアリアって人が激怒していた、

って聞いたから」

「あつ、そーいやあのままこっちに來たから、話がうむやむになつてた」

焦るクロウをみて、少し喜ぶ少年。今までの仕返しが出来たからだろう。

しかし、クロウはすぐに冷静さを取り戻し、うまい言い訳を考え始めた。

なにやら、ないものかな。うーん……あつそーだ。

「少年、なにか事件が起こったら報告しにきてくれ。俺は、少し作業するから」

一旦会わないようにしよう、俺が考えた最善の手？だ。ついでにこれらの準備も出来るし、一石二鳥ってやつだな。

「えっクロウさん、もしかしてひとまず逃げようとしてませんか？しかも、オレを巻き込んで！」

少年はすぐに反対するが、クロウは聞く耳を持たず、結局少年が折れた。

「もう、勝手なんですから……。なにか大変な事が起こっても知り

「ませんよ！」

「大丈夫、大丈夫。たかが数日だぞ、そんな大事件起こるわけないじゃないか」

クロウは、余裕を持ってそう少年に返した。しかし……少年が言った事はこのあと起こり、クロウがこの時の自身に後悔するのであるのだが……。

「というわけで、俺は、あの部屋にこもるからあとはよろしく」

「えっ、べつにクロウさん、ここで作業してもいいですよ」

「いやあ、その申し出は嬉しいんだが、ここじゃあ、作業出来ないんだ」

クロウは申し訳なさそうにいう。少年も若干悲しそうな顔をしながら、

「いや、いいんですよ。無理なら仕方ないですもん」

「悪いな、少年。まあ、急いでもする事でもないし、今日は泊っていいくでしょう」

明日から徹夜かな、クロウは頭でそう思いつつ、少年の部屋で泊まることにした。

「クロウさん、大変ですね」

いきなり少年がそんな事を言ってきた。

「いきなりどうした？」

「いや、クロウさんの携帯なんです」

少年はそういい、俺の携帯を見せてきた。　なんでさ、なぜに少年が俺の携帯を……。まあ、そこは聞いてはいけなさそうなので聞かなかったが。

「でっ、俺の携帯がどうかしたのか？」

そう聞くと、俺に携帯の画面を見せてきた。

「えっ、なにになに？……新着メール104件だど！」

俺は少年から携帯を返してもらい、メールボックスを開く。　そういえばかなり前から、携帯触ってなかったな、とか思いつつ、メールを見る。

『沢村キリカ…
なんで勝手に行っちゃったの?』

『ねえ、なんでなんで?』

『なんでメール返してくれないの!』

そんなメールがたくさん来ていた。そういや、あいつにPCアドレス教えてなかった!

そして最後のメールには…

『まさか、何かあったの? 私も日本に行くから待ってて』

と記してあった。

返そうにも一週間前。あいつならもう来てるかも知れない。

「ああ、俺オワタ。」

「どうしたんですか?」

そんな少年の声も聞こえず、俺は来日する脅威に怯えることしか出来なかった……

第5羽 ご連絡は計画的に？（後書き）

そろそろバトルが書きたくなってきたっす！

というわけで次回の次回はバトルの予定です。

では、さようならです

第6羽 懐かしき者、現る（前書き）

なるべく早くあげようと頑張りました。

今回は、結構飛んでしまった。だけど、早くバトルに飛びたかった。反省はしている、だが後悔はしていない！

ということで、どうぞ

第6羽 懐かしき者、現る

あらすじだ

神崎・H・アリアの情報を手に入れ、大まかな事が分かったクロウは学校をサボって寝る。

そして、少年と話し少年の家に泊まっていくことに……

そこから話は始まる。

これって必要だったのかなんて発言は控えてください。

第6羽 懐かしき者、現る

「少年、世話になったな。」

「だから、名前を使いましょうよ!」

俺はそんな発言をスルーして少年に背を向ける

「じゃあ、頼んだ、問題が起きたらすぐに伝えてくれ。」

「は、はい。わかりました！」

さて、では行くとするかね、俺の作業場に……

俺は目的地に向けて歩みを進めた

数日ただだろう、ある日の朝。俺は、起きて作業をしていた。

なんの作業かというと、ある道具を作っているんだ。

これは完成すれば、俺にとっての切り札となりえるものなんだが、その分作るのも難しい。

しかし、早く作らないといけないのも事実。

だから、ここ最近はずに作業をしている。そのため、体力がヤバいんだ。

だからこそ、俺はこんなフラグ台詞を言ってしまったんだろうな

「今日も無事に何事もなく終わりますように：」
と。

事件は起きた。

それは、あれから数刻も経たずに起きた。俺は窓をふとみて、雨が降ってるなあ、とか思っていると

ブー、ブー

「うん？携帯が鳴ってるな。誰だろう？」

そう言いながら俺は、ポケットにいれてた携帯を取り出し、開き画面をみる。

あのキリカの事があって、ここ最近は一昨日一回は携帯を確認してるよ全く、コワイからね

一一 閑話休題

画面に表示されているのは知らない番号だった。
もしかして、そう思い電話に出る

「もしもし、誰ですかい？」

『オレですよ、オレ』

なんてこった、まさか俺を詐欺にかけようというなんて……まだ、
子供もないのに

『クロウさん、変な事考えてませんか？』

なっなぜ俺の名前を：

『いやだから、オレですよ』

少年、地の文を読み取ってはいけないぞそいつはおいらの仕事だ！

「まあ、冗談はおいといて。少年、なにかあったのか」

冗談だったのか！というのが聞こえてきたが気のせいだろう

『聞こえてますよ、ねそれ！まあ、それよりクロウさん、大変です。
どうやらバスジャックが起きたらしいんです』

“バスジャック”その単語を聞きクロウはふざけるのをやめた。

「それは、本当なのか？」

『はい、これは本当です。』

そう言って少年は、俺にその情報をいろいろ教えてくれた。

どうやらジャックされているバスに乗ってるのは武偵らしい。まさか、武偵殺しか！？

今は考えてる暇などない。

「ありがとう、少年。俺は助けに行くよ」

「了解です。……頑張ってください。」

俺は通話を終了し、家を飛び出す……直前にまた電話がかかってきた。

「この、忙しい時に……」

携帯を取り出し、電話に出る。相手は、

『あたしよ、アリアよ。クロウ今どこ？』

神崎・H・アリアだった。

「今、家だが……どうしたんだ、急に。俺は今、行かなくきゃいけねー場所があるんだ。」

『事件が起きたのよ。だから、女子寮の屋上に来なさい。すぐ』

「まさか、バスジャックの事か？」

『さすがね。話が早いわ』

これはちょうどいい。アリアがいるなら救出が楽になるからな。

「分かった。なら、今すぐに向かう」

家を出た俺は、降りしきる雨の中、屋上に向かって走り出した……

俺が屋上につくとそこには3人いた。

まずはアリア。C装備（SATやSWATにも似た、強襲科がよく使う、攻撃的な装備の事）に身を固めてる。そして、キンジ。こちらも装備で身を固めている。

最後にレキ。階段の下で体育座りしていた。

レキとは、入試から、Sランクに格付けされ、現在もSの、狙撃科スナイプの天才少女。身長は、アリアより、少し大きい。外見は美少女なのだが、感情が読めず、何を考えてるかわからない、キンジ曰わく、

ロボットっぽい性格だそうだ。

レキはヘッドホンをつけて何か聞いているようだ。
俺は少し気になって声をかけた。

「レキ、いつもおもうんだが、何を聞いているんだ？」

「風の音です。」

そう言って、ドラグノフを肩にかけ直した。

風の音ねえ、俺が使う風はなんて言ってるだろう、いつか聞いてみたいな

「時間切れね」

いきなりアリアが俺たちにそう言った。通信が終わったみたいだ。

「もう1人ぐらいSランクが欲しかったとこだけど。他の事件で出払ってるみたい。」

「少し待とうか。キンジはわかるが、俺はただのBランク武偵だぞ。
しかも情報科インフォルマの」

そう、俺はSランクになるのは、いろいろと面倒だと考え、わざとBランクにまで落ちたのだ。しかも情報科だから目立たないし。

だから、アリアは何を根拠に俺にそんな事を言ったのか分からない。

「よく言うわね。あたし調べたんだけど、あんた、結構他の科に自

由履修してるわよね」

確かに、俺は様々な物に手をだしているな、

自由履修とは、転科せずにでも、他の科の授業を自発的に受けにける制度だ。単位はもちろん貰えないが、武偵はたくさん技術が必要だから、これをしているやつは多いらしい。

「その中でも、強襲科の時の成績は、実際はSランクの実力あり、と記録されるくらいの実力を持ってんでしょ？」

「確かに、そこは否定しないよ。なるほど、それなら、Sランクっていう理由は分かるな」

先生さんよ、それは消しといてって言ったじゃないか。はあゝ、面倒だゝ。蘭豹め、いつか仕返ししてやるゝ、どんな仕返しをしてやろうかな？あ、あの情報をバラしてやろうか、出会い系サイトのやつ。

「クロウ早くいくわよ！」

どうやら、俺が先生への仕返しを考えている間に作戦が決まったらしい……マジカヨッ！俺、作戦知らないんだけど……

まあ、なんとかなるかあ

とりあえず俺はへりに乗ることにした。

side キンジ

「はあ、これが最初の事件だなんてな」

俺はあまりの自分の凶運にため息をついた。

俺はアリアとある約束をした。そう、それは自由履修で強襲科に一旦行き、それから、一番最初に起こった事件と一緒に解決することだ。それは、どんなに大きくとも、小さくとも必ずだ。

本当は、クロウもその仲間入りをする予定がアリアの中でたっていたが、あいつはどこかに逃げていったから、仲間入りしなかった。

そして、最初に起きた事件がバスジャックだなんてな。しかも、危険にさらされているのは、武藤を始めとする武偵高^{うち}の生徒たち。なんて不運なんだろうな。

そんな事を考えていると、レキが

「見えました。」

と言ったので、右側の防弾窓から外を見る。

今、俺達がいるのは、台場の上空で、視線の先には、建物と道路は見えるが車なんて、ほとんど見えない。

「何も見えないぞレキ」

「ホテル日航の前を右折しているバスです。窓に生徒が見えます。」

「ああ、確かに見えるな。」

クロウもそんな発言をする。

「よ、よく分かるわね。あんた達視力いくつよ？」

「左右ともに6・0です」

「俺は、5・0がいいところかな?……力なしで」

お互いに爆弾発言をさらっと言った。クロウ、ボソツと何を言ったんだ?

「そろそろかな……うん?」

いきなり唸ったクロウを見ると、何やら様子がおかしい。

「ちっ、奴らめ。このタイミング、狙ってきたのか。悪い、アリア、キンジ、レキ。俺は先に邪魔者達を掃除してくる」

「邪魔者って何だ?」

俺はそう聞く。

「悪いな、こいつは教える事が出来ないんだ。しいていうなら、悪者退治かな？」

クロウは笑ってそう答えると、扉を開き、落ちていった。

「ちよ、ちよっと死んじゃうわよ。」

そうアリアが言うのも無理はない。クロウは装備を何一つ身につけていないから。しかし、俺は知っている。

「大丈夫だ、アリア。あいつは風と友達だから」

俺はそう言って、外を指差す。アリアの何かいいたげそうな目がそちらを向いた時、やつは空を飛んでいた……

side
out

アリアがこちらを驚いて見ているのが分かる。あいつ、この能力は知らなかったのかな？

まあ、いい。とりあえず、奴らをさっさとお掃除しないとな。

俺は、空き地島まで飛ぶ。

そこには、バイオハザードみたいな奴ら《イーター》がうようよいた。

「しかし、こいつらを見るのも久しぶりだぞ」

最近動いてなかったんだがな、もしかしてまた何か企んでやがるのか

まあ、それより早くこいつらを倒さないとな、……奥に何やら強者の気配を感じるし

「さて、逝かせてやるとするか」

俺は奴らに向かって走り出しながら、アーチャーの愛刀ともいえる夫婦剣「干将・莫耶^{かんしょう・ばくや}」を投影する。そして、体全体を魔力で強化。

まず、一番近くの敵を切り裂き、そいつを他の敵に蹴り飛ばす。後ろからきた相手の攻撃を避けながら、周りに、双剣をなげ、

「壊れた幻想」
フロックン・ファンタズム

そう呟いた瞬間、剣達が爆発する。
一気に敵が消し飛んだ。

「こいつは多すぎだろう。 あれ、使ってみるか」

周りの敵を一旦蹴り飛ばし、そう言うところクロウは手をかざす。そこに風が少しずつだが集まっていく。

そして集まった風は近くの風を巻き込んでいく。

そして、巻き込んだ風をすぐに圧縮していく。徐々に徐々に、大きくなり、最終的には、サッカーボールくらいになった。

「これは痛いぞ。」

クロウは下にそれを叩きつけた。そして瞬時に、そこに何十、何百、いや何千という短剣を投影した。

風がそこを中心に爆発する。風がイーターどもに向かっていく。それに乗っていく短剣達。まさしく、‘無数の剣戟’。かまいたちで切り刻まれ、風に乗った短剣が体に刺さっていく。そして、約、9割は倒れた。

「いやあ、これは人間に使うの禁止だな。凶悪だし、何よりグロい。」

クロウは周りの光景をみてそう思った。周りに転がっている死体（まあもともと死体みたいなものだったが）は、身体中が裂け、内臓がでてたり、首が飛んでたりと悲惨な光景になっている。

まあ、この光景をみて、平然としているクロウはやはり、少し壊れているのだろう。

残った敵は2桁にも満たない数。

そいつらをクロウは、素早く移動して反応もさせずに葬っていく。ついに最後の1人を殺した。

「さて、さっさと向こうに行くか」

双剣を消して、戻ろうとしたその時、禍々しい気を感じ、振り向く。

振り向いた先には、こちらに向かってくる槍。普段のクロウなら、余裕で避けれる投擲。しかし、クロウは何かを感じていた。

こいつは、避けれない、確実に防がないと、と。

だからこそクロウは使った。過去、銃弾達から身を守った、ギリシヤ神話のトロイヤ戦争で使われた盾

「熾天覆う七つの円環」
ロー・アイアス

を。

盾にぶつかる槍。そして、そのままこちらの命を取ろうとこちらに進んでくる。

盾の花びらも7枚からだんだん枚数が減っていく。

「やばい、もっと魔力をこめなくては」

クロウは魔力を送り盾を強化するが、花びらは破られていく。

最後の一枚という所でついに槍が止まった。

クロウはその槍を見て驚愕する。

「そ、そんな、これは何かの間違いだろ!？」

そう、この槍の持ち主は1人しかいない。過去、クロウ達と戦った、伝説の大英雄。

そして、この槍がある、それが意味している事は

「間違えじゃないぜ、久しぶりだな、小僧」

全身を青で固めた、その服装、青色の髪に、その凜猛な目つき。

「なんで、お前がいるんだよ、ランサー!」

そう、クロウの前に現れたのはランサー、アイルランドの光の御子
“ クー・フリーン ” だった……

第6羽 懐かしき者、現る（後書き）

さあ、なぜランサーが出たのか、これは次回で明らかになる……かな？

ついに出了ました、ランサーさん。

僕は槍兵さんも好きなんですよね、まあ一番はやはり弓兵さんがWWWW

これから、オリジナル要素が入ってきますがよろしくお願いします。

ではでは、さようならです！

第7羽 極限状態での戦闘!?(前書き)

ふう、今回は少し説明が多くなった気がします。

そして、バトルが少ししか書けなかった(一・一;)。

では、どうぞ

第7羽 極限状態での戦闘!?

あらずじだよ

突然起こった“バスジャック”。

危険にさらされてるのは、友人をはじめとする同じ高校の生徒。

クロウ達はヘリで助けに向かうが、そこには、邪魔なイーターどもが……

イーターを蹴散らすクロウ。そして、戻ろうとした時に突如投げつけられた一本の槍。

それを防ぎ、見た相手はいるはずのない者であった……

それじゃあ、始めるよ

第7羽 極限状態での戦闘!?

「なんでお前がいるんだよ！」

俺はそう言い放つ。こいつは前の世界のある戦いによって呼び出された、サーヴァント“英霊”というものだ。

サーヴァントとは、その名の通り、使い魔を意味する。しかし、こいつらはただの使い魔じゃねえ。

俺の前の世界では、魔術師同士が戦うとある小さな戦争があった。国対国ではなく、国内の、さらに小さな市で行う戦争だ。

その戦争には、ある賞品があった。その賞品は何でも願いを叶えてくれる“聖杯”と呼ばれるものだった。

その聖杯を目指し、争うのが、この戦争『聖杯戦争』だ。

しかし、その戦争では、聖杯によって7体のサーヴァントが呼ばれる。しかも、それぞれに器があつてな。

セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー、といった具合にな。

そして、どのサーヴァントも、かなりの強さを持っている。どのくらいかというと、人間では、まず勝てないレベルだ。

そして俺の目の前にいるのは、最速のサーヴァント、ランサー。こいつの真名はクー・フリーリン。

太陽神ルーを父にもつアイルランドの英雄だ。

みんな、“ゲイボルグ” って聞いた事あるよな？あのゲームとか、アニメとかで出てくる、槍の名前としてよく出てくるやつ。

その持ち主でもある。

だが、謎だ。なぜこいつがこっちの世界にいるんだ。

確かにこいつを含め、ほとんどのサーヴァントは消えたはずなのに……

「敵を前にして考え事だあ、いい度胸してるじゃねえか」

その声に反応し、俺が思考をやめ、前を見ると、目の前には槍の穂先が……

「うあっ！！！」

俺は間一髪それを体を横にずらし避ける。そしてすぐに後ろに下が
り、態勢を整える。

ちっ、内心俺は毒づく。相変わらず速い。今、避けれたのも勘だぞ。

今回ばかりは勘に救われたが、実際、勘がはずれていたら、クロウはこの世から去っていただろう。

クロウの身体能力は実をいうとそこまで高くない。一般人より、1つか2つ頭が出た程度なのだ。しかし、彼がなぜ強者なのかというとその能力が半分の理由を占めているだろう……。

ヒステリアモードに様々な魔術。これが彼を助けている。

しかし、今回の場合、それを使うのはほぼ不可能な状態となっている。

まず、ヒステリアモードは、人がいないと使えないので、ある手段以外は使うことは不可能。

次にさっきでこそ、イーターを余裕で倒していた彼だが、実際には肉体的にも精神的にも限界が来ていた。

数日寝ずの作業、度重なる不運、そしてランサーの放つ威圧感、一瞬の命のやりとり。これらが連続で続けば、それも当然の事だろう。

そして魔力の方も、とある作業により、半分しかなかった内、さらにイーター戦で半分が3分の1になっていた。

出来れば魔力は取っておきたいところだが、ランサーは身体強化なしで勝てる相手じゃねえ。

打つ手はないのか？

考えろ、考えるんだ！

「ランサー、目的は何だ、俺なのか？」

俺は考える時間を稼ぐため、やつにそう問いかける。乗ってくればいいんだが……

「そうだ、ある人物に頼まれてな。『御剣クロウという者と戦い、力試しをしてこい』とな」

クロウは少し、ほっとした。

なんだ、ガチで殺りにきたんじゃないのか、と。

だが、その安心もすぐかき消えたが

「ただし、『強さが認められなかった場合殺せ』という命令も受けてんだ」

ちっ、実力を見せないとやっぱり駄目か。だがなあ、俺の今の状態が悪すぎてほとんどなにもできねー状態なんだよなあ。

「しかし、それがあん時の小僧とはな……。まあ、無駄話はやめてさっさと闘ろうじゃねえか！」

ランサーは一瞬で俺の方に駆けてきて、その槍で俺を突こうとする。

「ちっ、やるしかねえよなあ」

俺は瞬時に身体強化をして、夫婦剣を投影。やつの槍を下から剣で打ちつけ俺から穂先をそらす。

ランサーは態勢をたてなおし、連続突き。俺は、それを防ぎ弾き、

夫婦剣を投げつける。しかしやつはそれを叩き落とす。

予測していた俺はホルダーから素早くグロック18Cを取り出す。

「現代の武器ってもんをみせてやんよ！」

ババババーン、銃口から、連続で弾が放たれる。

「俺に飛び道具は当たんねえよ！」

ランサーの体に弾が当たる事はなかった。弾はランサーを避けていく。まるで何かに護られているかのように……

だが、俺はそれを前世で知っていた。これは陽動。けして当たらないがそれでも隙はできる。俺の今の力量をごまかす技を使うにはこの隙をつくしかない。

「いくぜ、よく記憶に焼き付けやがれ！！」

手に、魔力で作った一振りの名もなき名刀。それに風を纏わせる。俺は脚力を限界まで強化。そのまま踏み出し、もの凄い速さでやつの前に入る。突きの構えになり、思いつきり体を捻り、溜める。

「喰らいやがれ、風突^{ふうとつ}！！」

そして、捻りを利用し、風を纏うことで、さらに鋭くなった、渾身

の突きをやつに放つ。

しかし、現実とは非常に厳しいものだ。

やつは、見越してたのか自身も突きを放ち、相殺させやがった。

「おいおい、嘘だろ!？」

俺は思わずそう言ってしまった……

まさか突きを突きで相殺してくるなんて、だが、こいつはランサーだ。最強の槍使いなら可能なだろう……

「さっきのは、なかなか良かったじゃねえか。なら、こっちも行かせてもらうぜ!」

ランサーは持つ槍の力を解放した。

英霊っていうのは、それぞれが宝具というものを持っている。宝具というのは、人間の幻想を骨子にして作り上げられた武装のことだ。例えば、神話や戦記などに書かれている、戦歴、伝説があるだろ？

それらの伝説などにある、英霊が、英雄の頃の武器、その逸話から宝具は出来る。そして宝具の数、強さは伝説の数、凄さで決まっていく。俺の記憶が曖昧だから、だいたい事しか、説明できないがな。

そしてやつの宝具はランサー、クー・フリーンが、若き頃に影の国の女王スカアハから授かった、魔槍、『刺し穿つ死刺の槍』ゲイボルグ

能力は、心臓を貫いたという結果をもたらす因果の逆転。そして、つけた傷の治りが遅くなる呪いだったよな、確か……

ランサーの槍、ゲイボルグから、禍々しいものが感じ取れる。それはだんだん強くなっていく。

俺は近距離から、手に持っている剣を投擲した。それはやつの手前に刺さる。

「どうした、小僧。届いてすらないじゃねえか」

ランサーは、俺を馬鹿にするように笑った後、ついに構えた。

「その心臓、貫い受ける！」

――刺し穿つ（ゲイ――

」

ついに、必殺の名を冠する魔槍が、俺に向けて放たれようとしている。その瞬間俺は……笑みを浮かべた。

ブローケンファンズム
――壊れた幻想――

ランサーの周りに弾かれた、二本の剣、夫婦剣と、目の前にある剣の魔力が爆発する。

これが俺の考えた作戦。

夫婦剣を投げつけ、弾かせる事で剣はやつの周りに残る。そしてランサーに向かって、銃を使うなどして奴に考えさせる隙を与えないように連続で攻めていく。最後にゲイボルグを使おうとした時にドカン、という作戦だ。

これの重要な所は、いかにして奴を移動させず、ゲイボルグの真名解放をさせるか、だ。

これのために、身体強化を限界までして、やつの目の前まで行ったというわけだ。

「さあて、どれだけ喰らわせたかな？」

正直、もう対抗する手段はほとんどない。魔力はほとんどないし、

足もさっきの強化でいかれた。もし奴にダメージを負わせてなかった場合、俺はゲームオーバーだ。

爆発による煙がはれてきて、奴の姿が見えてきた。

「ほとんどくらってねえよ、あいつ」

多少の傷はあるが、大怪我を負わす事は出来なかった。

「ふう、今のは結構効いたぜ小僧」

ランサーは軽くそう言う。

「普通の奴なら、結構どころじゃあないんだがな。さて、まだ闘るか？」

実際は闘う事なんて出来ねーがな

俺は、そう思い少し笑った。

「勿論、と言いたい所だが、力試しは済んだ。今日は帰らせてもらうぜ。」

それに、とランサーは続ける

「本調子じゃねえ奴に勝っても、嬉しくねえだろ？」

そんじゃあな、そう言っってランサーは去っていた……

「あいつ、分かってやがったのかよ」

ふう、と息を吐きながらクロウはその場に座り込んだ。

「何とかなったなあ。そういやあ、アリア達は？」

俺は胸ポケットに入れていた携帯を取り出し……ため息をついた。

「やっぱり、俺は不運なのかなあ」

俺は服を見ながらそう呟く。

クロウが見ている先には、穴が開いた胸ポケットとボロボロになった携帯があった。

クロウは精神的ダメージをさらに負ってしまった……

s i d e ? ? ?

どこにあるかは知らない、とある建物。その中に、2人の男が会話をしていた。

「首尾はどうだ、順調か？」

「今の所はな。どうした、心配せずとも大丈夫だ。」

「別に心配なんぞ、してないわ！」

「どうしたそんなに怒って。まさか凶星だったのか」

1人の男は、笑いながらそういう。
もう1人の方は苛つきはじめた。

不穏な空気が流れる中、ドアが不意に開かれる

「ふう、行ってきたぜ」

そう言いながらまた1人入ってきた。この者は青年という言葉がまだ似合う外見だ

「ご苦労、それで結果はどうだった？」

「ふん、分かってるクセに……。奴は十分な強さを持っていた」

「そうか、なら今度は奴を送るとしよう。もう下がっていいぞ。」

その言葉を聞き、青年は建物から出る。

そしてひと息つき、

「俺と殺りあう前に死ぬんじゃないぞ、小僧」

そう呟いた……

第7羽 極限状態での戦闘！？（後書き）

FATEの知識が少し曖昧なので設定が違いかも知れませんが、この作品の設定ということでお願いします。

ランサーさんまじかつこいいます。

実際、ケルト神話でも、死に際に身体を柱に縛り付け倒れる事をよしとしなかったらしいですから、まじ漢です。

次回は、ハイジャック編です。

では、次回でまたお会いしましょう。

第8羽 久しぶりの登場！（前書き）

今まで、本当にすみません

読んでくれた皆様に言い訳やら、謝罪やらをしたいんですが、その前に、毎日この駄作を読んでくれる人たちに感謝です！

では、短いですが、どうぞ

第8羽 久しぶりの登場！

あらすじ……

クロウは、過去の英雄と対峙する

クロウは力を発揮できないものの、なんとか相手を撤退させたが：
：「俺の携帯がああああ」

始まる

第8羽 久しぶりの登場！

side クロウ

「ああ、どうやって帰ろうかな？」

壊れた携帯を見ながら、1人呟く。

見事に穴が空いた携帯は、やはり機能しなかった。
空を飛んで帰ろうにも魔力が底をつきかけている。飛んでる最中に

墜ちて逝くつてのはカッコ悪いし

そうこう考えていたが、「まあいいか」、という結論が出て考えるのをやめた

人間というものは考え事が1つ済む？と別の考え事が浮かぶわけ
して……

「ランサーは何故、
こっちに居たんだろうな？」

そっちについて考え始めた。幸いな事に考える時間はある

まず、あいつが居た理由として考えられるのは、こちらにも聖杯戦争がある、または俺と同様に、聖杯によってこちらに連れてこられたぐらいかな？ 後は、正直考えつかん

しかしなあ、聖杯戦争の可能性はほぼ0なんだ。

俺は今まで、世界を渡り歩いて人助けをした

ある時は、紛争を止めたり

ある時は、裏組織を潰したり

ある時は、危機にさらされてる者を助けたり

まあ、所詮は偽善的活動だが

俺は自嘲気味に笑いながらそう思う。

そうして様々な物を見てきたが、あちらの世界のような魔術を見たことは未だない。よって、この世界に魔術がある可能性は0に近く、もちろん聖杯戦争などはないに等しい

ということとは

「やはり、聖杯かな？」

この線が一番高い。俺自身が体験して、いまここにいるわけだし、それに、少しの間とはいえアーチャーもこちらに来ていたからな。しかし、そうなることやつに命令しているやつは「くろおお」：
：：：：

いま、誰か俺を呼ばなかったか？ うゝん気のせいかな？ しかし確かに聞こえ「くろおお」、やつと見つけた！

「うん？ 後ろか！？ ぐふっ！！」

あれ、目の前がぼやけて：：：：

ドサッ

俺は意識を手放した：：：

side ???

「うーん、一体どこにいるんだろう？」

私は街を見下ろしながら空を“飛んでいる”

何故飛んでいるのかというと、彼女もまた少々特別だからだ

飛ぶのって楽しいね！でも少し疲れるけど……。なら止めたらって
思うかもしれないけど今回はただ飛んでいるだけじゃないんだ。私
が飛んでいるのにも理由があってね。ある人物を捜してるんだ。

それは、私が今現在、久しぶりに興味を持った人で、私たちレイブ
ンのトップでもあるんだ。

でもトップのわりに、ほとんどホームにいないんだよね。いつも、

「俺、最高のプリンを探し……。ゲフン、ゲフン、自分を成長させ
るために旅に出ます。

だから捜さないでください（笑）」

っていう置き手紙残して、どっかに行っちゃうんだよね。

わざわざ手紙に本音を残す必要あるのかな？とか思うけど、まあ、
みんな気にしてないし、私も気にしないことにした。

こんな彼だが、今回は事情が違った。なにやら、任務として、日本

に向かったらしく、当分帰ってこないとの事。私は止めたかったが、彼はそれを想定してたらしく、私に内緒で日本に旅立ってしまった……。

私は任務だから仕方ないと思い、仕事に取りかかり始めた。彼が出て行って、約2年が経った……

「くろー、元気にしてるかな？」

私はここ最近、仕事がなく彼の事ばかり考えていた。呼び方も、少し変えた。

やっぱり愛称があったほうがいいよね。

まあ、そんな事はともかく、最近くろーから連絡がこないんだよ。

それまでは少しながらも連絡が来てたのに……

なにかあったのかもしれない、連絡が出来ない状態……助けに行かなきゃ！！

そう考えるとたまらなくなつて、私は止める奴らを諭して（少々、痛い目にあってもらった）日本に飛んだ。

「待ってて、くろー！！！」

彼女が、クロウを気絶させる前の話……

第8羽 久しぶりの登場！（後書き）

言い訳をしますと、親に電話料金の事情により、携帯没収され、執筆出来なかったというわけです

本当にすいませんでしたあああ！

これから読んでくださると幸いです

第9羽 主人公は鈍感……これ常識？（前書き）

今回もすいませんしたああ！

体育祭、文化祭で忙しくまた、結構めんどい役目を背負っていたので書けませんでした

しかし、これからは何もない！！

遅れを取り戻します

第9羽 主人公は鈍感……これ常識？

あらすじだよ

これからの事について考えていたくろー。しかし、背後からの衝撃に気を失う

さあ、くろーは無事なのか！？

なゝんてね（笑）

始まるよお

side クロウ

――夢を見ていた。内容はいつもと同じ……ではなかった。泰時
爺さんが俺に向かって、何かをさげんてるんだ
ただ俺には何て言ってるのかは分からない。分かるのは、爺さんが
何かを伝えたそうにしている、大事な事を――
最後まで言葉は聞こえることなく俺の視界は真っ暗になった……

第9羽

――次に目に映ったのは、茜色の空だった。どうやら、気を失ってからかなりの時間が経っていたらしい。ちょうど太陽が落ちていく所で、その様子はとても綺麗だった。その景色に目を奪われていて、気づくのが遅くなったが疑問に思う事があった。

なぜだかは知らない、後頭部に柔らかい感触があった。

この感覚には覚えがある、だけどそれが意味してるのは、“彼女”がいるということ

「あっ、やっと起きた。大丈夫、くろー？」

声のする方を見ると、やはり彼女、沢村キリカがいた――

まあ、わかっているが一応聞いておこう

「なんでここにいるんだ？」

キリカは待ってましたと言わんばかりに表情を輝かせた。

「それはね、なんででしょう？」

あゝあ、面倒な事になったなあと思いながら少し、この会話に付き合ってやる

とりあえず身体を起こして（何故かキリカが悲しそうな顔をしたが、気のせいだろ）服の汚れを払い

「それが分からないんだから聞いてんだよ」

と、聞いてみた

「しっかたないなあ、教えてほしい？」

別に分かってるんだが、まあ聞いてあげようか

「はいはい、教えてくださいませ、お嬢様」

「…………お嬢様／＼／＼／＼／」

うん？風邪でもひいてるのかな。顔が赤いなあ、なんてどこかの鈍感主人公ではないのだ！！

そうこれは恥ずかしいのだ！そしてこれが意味することは…………

嫌がってるんだな。そりゃあ、俺みたいな奴なんかに言われたら嫌すぎて恥ずかしいよな。

「…………はあゝ、夕陽が綺麗だなあゝ」

「……？いきなりどうしたの、くろー？涙がでてるよ」

自分でいって傷ついてしまった……
今日は帰って寝よう

「いや、夕陽が目に入っただけだよ。…………大丈夫、大丈夫だ。強く生きろ、俺」

「それならいいけど」

「はい、1てへっ、もらいました！……ってなにしとんじやい！！」

はあ、うちの組織大丈夫かな？と悩むクロウだった……

よくある光景
レイブン

食堂に5人の男達が休憩をとっていた

「なあ、最近キリカさんをみかけないんだが」

1人の男がつぶやく。すると違う男が

「知らないなあ。確かにあれほど騒いでたのにな」

「もしかしたらリーダーのところにいったんじゃね？」

「そうかもなあ。まあ、別にいいけどな。よし、今日もやるか」

その言葉に男達の目が変わる。まるで戦場に出かける兵士のように
……

そして素早く懷に手を伸ばし

「狩りの時間じゃあああいい！！」

「今日はナル○二頭狩りだなww」

「早く集会所に入らないと4人までだぞ」

「よっしゃ、入れたぜ。……今回はてめえの負けだな」

「チクショー、ソロでティガレック○狩ってやる！！」

彼らの戦いは始まったばかりだ……

「そうかなあ。まあ、別にいいけどな。よし、今日もやるか」

その言葉に男達の目が変わる。まるで戦場に出かける兵士のように……

そして素早く懷に手を伸ばし

「狩りの時間じゃあああい!!」

「今日はナル○二頭狩りだなww」

レイブンは今日も平和だ……

第9羽 主人公は鈍感・・・これ常識？（後書き）

今回は短くなってしまいました

久しぶりに書くとなかなか書けない

第10羽 進んでいく物語（前書き）

今回も遅れてしまいすいませんでした！

テスト勉強が作者の前に立ちだかつて……（＜――＞）

第10羽 進んでいく物語

それじゃあ、あらすじだ！

俺は、キリカに気絶させられた時、変な夢をみた、あれはなんだったんだ？

しかし、そんな事を考える時間はない。早く、戻らないと！

これは戻った後の話だ

それじゃあ、始めようか……

第10羽 進んでいく物語

「ちっ、考えが甘かった……」

俺は部屋の中で小さくつぶやいた。

「今回は、確実に俺のミスだったとしか言いようがない。あのタイミングで奴らが来たときに気づくべきだった、いや、それすらも“あいつ”にとっては予測範囲内か。そうだろ、」

クロウは大きくため息をついて、ふと微笑んだ。ライバルの強さを喜ぶかのように……

そのせいか、クロウは自らの独白を聞いていた者がいるとは気づかず、小さな不幸に襲われてしまうのだが……

s i d e o u t

「ルンルンルン♪」

これをまだつぶやく人がいるのかっ！と思うような言葉を口ずさみながら、キリカは料理？を作っていた

「なんで？をつけたの！」

（地の文にツツコミをいれるのはやめてください　B V作者）

「りょーかいです！！あれ？私、なんで独り言なんか？」

（そうそう、その調子でB V作者）

さて、訂正します。どうやら料理？失礼、ダークマターを作った「誰もダークマター作ってないよ！！」……キリカは料理を作っている様子。

「ここのキッチン、すごいなあ」

キリカがそう思うのもそのはず。クロウはものすごい料理好き、それこそ弟、士郎を超えるほどの。そんな彼の事だ、キッチンにはこだわりを持っている。

それこそ、調理器具から食器にかけるまで、素人目でもわかるくらい。

「まあ、こんだけ設備がいいと、いいのが作れるよ！！」

しかし、それをほぼ勝手に使っている彼女の神経もすごいが……

そうこう料理をしているキリカであつたが、……耳に入つた言葉が気になり、それに意識を傾ける

「今回は、確実に俺のミスだったとしか言いようがない。あのタイミングで奴らが来たときに気づくべきだった、いや、それすらも“あいつ”にとっては予測範囲内か。そうだろ、……」

（くろーはまだ、悩んでるんだ）

キリカはある出来事を思ひだしていた……

あれからキリカに運ばれて帰っているクロウはキリカに携帯電話を借りキンジに連絡をいれるが繋がらない。

次に、レキにかけるとワンコールで繋がった。

そして、レキからアリアが怪我を負ったことをきく。一瞬、なにかの冗談かとクロウは思ったが、レキがそんな嘘をつくはずがなく……

それから家につくまではクロウは黙ったままだった

――回想終了――

そんなクロウを元気づけようと料理を作っていたキリカ。

彼の事は少なからず分かっている彼女だ。下手な励ましも、優しい言葉をかけても彼には意味はない、ならばそれに触れないことで彼を励まそうとする彼女の心遣いだったのだ……

「あっ、お鍋焦げちゃった……まあ、いいよね？」

あっお皿が……、あっ傷が入っちゃった：

クロウの為を思っ作っているはずの料理はクロウの機嫌をさらに損ねる事になっている。

クロウがキッチンで涙を流すのは、そう近くない未来である、あわれクロウ、大丈夫、必ず良いことが起きる……はずさ

一一 自らの失敗を恥じるカラス

しかし、カラスは挫けない
自らの理想、夢があるから

カラスを巻き込んだこの事件は徐々に終局に近づいていく

カラスはどんな奇劇を見せてくれるのだろうか――

第10羽 進んでいく物語（後書き）

最近、忙しくて文が短いですが徐々にまた戻していくつもりです。

そろそろ、ハイジャックに入っていかなくては

それでは、さようなら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8510s/>

緋弾のARIA ～道化な鴉は世界を騙す～

2011年10月11日23時54分発行